友『TSしたら？』俺『おk、人生やり直すわ』改稿版

二ツ井 五時

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初めまして！おはようございます！こんにちは！こんばんわ！

この小説のあらすじ読んでるそこのあなた！人生辛くない？

そんなあなたにこの小説！これは自分の人生に見切りをつけたど阿呆がＴＳして転生もしちゃって頑張るお話です。

実はこれ旧作があるんですけど１度ネタ切れで更新停止してます！

感想、評価はマイルドに！

レッツストレス解消！

あ、今回は一切鬱展開やるつもりはないので安心して読んでください。

あと、感想で「面白くない」「つまらない」って書かないで下さい！メンタルブレイクしてエタります。そう思った方は評価で１とかつけたって下さい。

目　次

閑話
閑話　【神様】転生する時行く白くてそれっぽいアレ【ガチ困惑】　1
本編
第１話　【ＴＳ】ＴＳしてみたった【ＲＴＡ】　5
第２話【待て落ち着け】チートが無い？ならなればいい【色々おかしいぞ】　8
第３話　【すなばのおやま】１歳児の公園デビュー【砂上の城】　11
第４話【出会い】（砂の城）築くは苦労、壊すは楽勝【我が一生の幼馴染】　15
第５話　【ここからは】幼女幼稚園に立つ!!【ようじょのターン】　19
第６話　【ようじょ】鬼ごっこだよ（真顔）【狩人と化す】　23
第７話　【ようじょ】あれ？待って、私何やった？【ガチ困惑】　27
第８話【数少ない】励まそう、幼馴染【シリアス回】　31
第９話　【親来ないと寂しい】お遊戯会、開催【来たら来たで恥ずい】　35
第１０話【八艘飛びを】剣道体験１日目【決めるようじょ】　39
第１１話【立体機動】剣道体験２日目【ようじょ】　43
第１２話【ようじょ】剣道体験３日目【縮地擬き体得】　47
第１３話【ダイアモンド？】剣道体験４日目【幼馴染】　51

第１４話【攻めのようじょ】剣道体験５日目　ＶＳ幼馴染【受けの幼馴染】――――――――――――――55
第１５話【流石イケメン】小学校入学してみたった【氏ねイケメン】――――――――――――――59
第１６話【ぷるぷる】友達を！作ろう！【私悪いようじょじゃないよ】前編――――――――――――――63
第１７話【ぷるぷる】友達を！作ろう！【私悪いようじょじゃないよ】後編――――――――――――――67
第１８話【ようじょ！ようじょ！】はじめてのうんどーかい【誰よりも早く！】――――――――――――――71
第１９話【ビバ！】はじめてのなつやすみ【サマバケ！】――75

閑話

閑話　【神様】転生する時行く白くてそれっぽいアレ【ガチ困惑】

「…知らない天井だ」

目を覚ますと、何も無い白い場所に居た。

何処までも『無』が続く、地平線の見えない部屋。

普通の人間ならこの場所に来た時、「何処ここ?!」とか「もしかして私、誘拐されてる?!」とか思うだろう。

で、ラノベとかアニメとか齧ってるオタ共は「転生キター!!!」とか「マジ卍」とか言ってるだろう。

ちなみに俺はどちらかと言うと……

「っっっしいやァァァァ!!!!」

後者！圧倒的後者！

やったぁぁぁ!!!!転生成功だぁぁぁ!!

あれでしょ?!ここ神やら精霊やらあの神霊的なそんなチックなのが「あなたは死んでしまいました。第2の生を与えよう」とか言うとこでしょ?

もうね、知らない天井だとか言ってたけど心情的にはもう知ってたの一言に尽きるよホントに！

「あの～…」

すると、近くから声が聞こえてきた。

女性のようなのに男性っぽく聞こえ、若くも老いているようにも聞こえる。

「え?·何その声…気持ち悪っ」

「ひっど?!」

突如頭に強い衝撃が襲い来る。

ふらふらする頭と視界の先には鉄製の桶、所謂『タライ』と呼ばれる物があった。

何故にタライ。

「あなたが私に対して失礼な事を言うからです！」
「さらっと心読まないで下さい神」
「『様』すら無い?!」
　ふわりと目の前に誰かが立つ。
　白くて長い髪に青い目。そして白い布に身を包んだ神々しい感じの人が居る。
　顔は中性的で、控え目な胸の女性だと言われればそうだと思うし、美形の男性だと言われても頷ける容姿をしていた。
「あの所々一言余計ですよ？私神ですよ？」
「そうですね神。さっさと転生させやがれください神」
「ホントに！あなた！横暴ですね！」
　というか神神って語尾じゃないんですから…と相手はすっかり呆れた様子。
　やっべぇ…調子乗りすぎたかな？
　前世はこんな事してるから人生辛くなったのかもしれない。
　自重しなくては。
「大丈夫ですよ。それくらいで私、怒りません。人間に限らず全ての生命など我々神にとっては下等な存在。あなた達が蟻になにかされても何も思わないように、私達もあなた達、下賤な物がが何を言おうと特に何も思いませんとも」
「少し根に持ってませんか？意外と沸点低いんすね」
「言ったそばからあなたは！転生する気あるんですか?!」
「ありますよ、だから早くしてください」
「誰のせいです誰の！」
　神様は渋々といった様子で空中に何やら文字のような物を浮かび上がらせ操作している。
　ああ、あれが神様能力か。すげえな。
　空中タッチパネルとか最先端すぎる。
　あれ、前世でも出来たらカッコイイのに。
「あなた達にはまだ早い技術ですよ…はい、では改めまして。ようこそ転生の間へ。未練を残して死んだ貴方を歓ｇ」

「転生する場所は前回と同じ地球。魔法いらないです。チートもいらないです。代わりに美少女にしてください。綺麗系じゃなくて可愛い系にして下さい。あと」
「注文が多い！話を最後まで聞きなさい！」
　その後俺は神様から転生の事について色々聞いた。
　俺は今回転生する為に死んだけど、そうやって死んだ生物は普通この転生の間に来れない事。
　しかし、元々の魂の力とかそんなオカルトチックな感じの物が俺は強かったようで来てしまったこと。
　なので次転生目的で自主的に死んだら転生の間に来る事は出来ず、煉獄で罪と記憶を焼かれ、綺麗な状態で輪廻の輪に戻り、新たな生命として生きていく事になるらしい。
「はい、質問です」
「挙手しなくても良いのですけど…どうぞ」
「もし、俺が来世で誰かに殺されたり、事故死したりとか自主的じゃない死を遂げた場合、ここに確定で来れますか？」
「…あなたそれ聞いて何やるつもりなんです？」
「人生リセマラ」
「命を粗末にしないでください！」
「冗談です」
「タチの悪い冗談ですね…その場合はあなたの善行と罪の重さを専用の機材を使って測ってとても良い結果が出れば来れると思いますよ」
「エジプトなのか西洋なのか…」
「あ、ちなみにですけど生を受けるのが嫌って場合は生前の行い次第で極楽浄土かヘルの2択ですね」
「まさかの日本文化も入ってきた。最早なんでもありか」
「そんなもんです神なんて。で、なんですけど」
　神様はこちらにあの空中タッチパネルを見せてくる。
　そこには「異界アルメイズ」とか「科学界サイティカル」などの色んな世界の名前があった。多分転生先のリストなんだろう。
「本当に元の地球でいいんですか？別の世界でやり直したいとかは

…」
「神様」
俺は神様の続く言葉を手で制すと、ハッキリとした口調で告げた。
俺が転生したい理由を。何故、転生目的で首を吊ったのかを。
「俺、美少女に、なりたいんです」
「…はぁ？」
「美少女です。正確に言うならあの橋本何某みたいに数千年に1度の美少女とか言われて見たいんです」
「はぁ…？」
「完璧美少女になりたいんです。でも気を許した人の前ではだらけちゃって『しょうがない奴だなあ』とか言われながらイチャイチャして、でも学校に行くと誰もが羨むスーパー美少女になりたいんです」
「…え？まさかその為に死んだんですか？」
「はい」
「…ホントに？」
「まじです」
……。
「では、その…そのように手配します」
「よろしくお願いします」
「じゃあ、えっと、今度こそ生をお楽しみください」
「ありがとうございます」
俺は神様にお礼を言うと、同時に意識が遠のいて行くのを感じた。
成程、これが転生というやつか。
はてさて一体どんな女子になってるのかな？
俺はワクワクしながら意識を手放した。

「……頭が痛くなる人間でしたね」

本編

第１話　【ＴＳ】ＴＳしてみたった【ＲＴＡ】

ふと思った。

「俺の人生、辛くない？」

元々人付き合いが得意な性格ではないのもあって、ほんのひと握りの人間以外には煙たがられていた。

俺は社会的な発言権が黙殺されている様に思えた。

誰にも、俺の声は届かない。

今の社会は個性を伸ばすだのなんだの言ってるが、和を乱すのは個性とは認めず”害悪”だと決めつける風潮があった。

そんな生き辛い世の中でも友人は居た。

少ないながらも俺の個性を許容してくれる人達は確かにいた。

そいつらも言わば俺と同じ様に、言ってしまえばはみ出しものだった。

黙ってれば普通なのにどうしようもなく空気が読めないやつ。

広く浅くにしか付き合えず、そこまで他人と深く関わろうと出来ないやつ。

得意な事は凄いのに、それしか出来ないやつ。

色んなのがいたけど、誰も彼もが何かしら人に対して諦めていた。

そんな奴らとバカやって生きていくのも悪くないとも思っていた。

でも社会はそんな俺たちを許容しなかった。

多数が良しとされ、俺ら少数派は淘汰される。

そんな世の中をとてつもなく窮屈に感じた。

俺は思わず友達に愚痴ったらこんな回答が返ってきた。

「ＴＳしたら？」

目から鱗だった。

というわけでＴＳしてみる事にしました！享年１８歳！

手段は首吊り！よいこのみんなはマネしないでね！

ちゃんと遺書も残したし、クッソ親不孝なことを除けばやり残した

ことは無い。
今回の人生では親孝行しよう。
ありがとう旧母さん、旧父さん。
俺は今世で新母さんと新父さんにめっちゃ親孝行します。
弟よ、後は頼んだ！
ちなみに現在の俺の状況を説明すると、いや、ＴＳしたしこれからは『私』って一人称にしよ。
俺は今ここで死んだのだ。
では改めまして。
私の名前はまだない。
生まれたてホヤホヤの女の子だよ！
生後０ヶ月なのに人の言葉を解するよ！
前世の記憶引き継ぎだったからね、仕方無いね！
え？赤ん坊はそこまで脳味噌発達してないって？
……。
転生力ぅ…ですかねぇ？
そこは気合だよ気合！
今私は看護婦さんの腕の中に抱かれている。
生まれた時ってほら回収されるじゃん？看護婦さんに、今そこよ。
でも、あれ？なんかおかしいな？
なんか周りがザワザワ動揺して…あ、そっか。
産声あげ忘れてた。
「おんぎゃぁ！おんぎゃぁ！」
おお、これは良い産声。
自己採点１００点中１２０点満点だね。凄いぞ私。
私が産声をあげたので安心したのか、周りの動揺は収束していた。
看護婦さんが私を私の母に渡した。
母は私を恐る恐る受け取ると感極まったのか泣きながら私を優しく抱きしめた。
私の体は母の温もりに包まれた。
前世じゃあこんな事されたら恥ずかしくて突っぱねてしまったが、

今この体だと突っぱねられないし、したくない。
腹を痛めながら産んでくれたのだ、そんな薄情をしたら罪悪感でもう1回転生をキメちゃう。
母は私に語りかけるように、私の名前を教えてくれた。
「生まれてきてくれてありがとう。貴女はミツキ。タカナシミツキよ」
と言う訳で私こと『タカナシ　ミツキ』爆誕しました！
これから大事に育ててね母さん？
私、貴女の自慢の娘になるから！

第2話【待て落ち着け】チートが無い？ならなればいい【色々おかしいぞ】

そんなこんなで早1年。
え？横着すんなって？
えーでも1年間何やった訳でも無いしなぁ。
あーハイハイわかりましたよ言いますよ。
私、ミツキは1年間ずっとハイハイと立つの練習してました！
そんだけかって？そんだけだよ!!
どっかのラノベみたいに魔法がある訳でも無いし、私、天才でもないんだから当たり前でしょ。
そもそも私チート拒否ったからね。
てか、アイツらが異常なだけだから、普通転生して突然あんなアホみたいに強くなるわけないでしょ。
私、普通の、ＪＫ（予定）。ＯＫ？
なんでそんな事やってるかって言うと、前世の母から聞いた話を思い出したから。
実は赤ちゃんの時のハイハイって意外に馬鹿に出来ないのよ。
何でも全身の筋肉とバランス感覚が鍛えられるらしい。
つまり、これを今やっとけば将来的にはナイスバデー間違いなしってことよォ!!勝った！
気になる人は〈赤ちゃん　ハイハイ〉で検索検索ぅ!!
多分かの有名なべ○ッセのサイトに載っかってると思うよ。
これ聞いてハイハイすれば筋トレに?!とか思ったそこのあなた。
赤ちゃんだけです。
人としての尊厳捨ててまでやるんじゃないよ。
で、私が旧母から当時聞いた時、
「アンタはハイハイしない子だったわぁ。お陰で手間が掛からなくて良かったけど」
と言われたのだ。

そういったのも原因なのか前世の私は身長だけが伸び、バランス感覚や筋力もあまり無かったので、球技は得意ではなかった。
なので、今世ではキチンとハイハイして体を鍛えようと思ったのだ。
が、このハイハイ。
最初がテラきつい。
マジで。
何がキツいって自重恐らく2．５Ｋｇを筋力の無い腕２本で動かさにゃならんのよ。
そっから腕鍛えてアザラシのポーズで動ける様になって、足を動かせるようにハイハイへとシフトチェンジして～で今に至る。
今じゃ支え無しでも立てるように！
やったぁ！私凄い！
生後８ヶ月にもなれば字もしっかり見れる様に（読めるとは言ってない）なりました。
よく動き学び、親の言う事をキチンと守る。
あれ？私、超絶良い子じゃね？
前世よりもスペック上がってそう（小並感）
この歳でここまで出来る子普通居る？いや、いない（反語）
あ、そうだよ1年の間に字が読める様になったんだよ。
で、漢字も意識的には理解した。
皆さんの為に紹介すると、私の名前は小鳥遊（こ）　深（う）月書くらしい。
それで、１歳になってやってる事だけど…
字を練習してる。
驚いた事に平仮名すらも書けない。
最初びっくりしたけどそりゃそうだ。
意識的には１８歳でもこの体自体が字を書くのに慣れてない。
これではあれだ、書ける書ける詐欺になってしまう。
ということで一心不乱にドリルに取り組む。
足し算、引き算、平仮名。
ちょっと手を伸ばして新聞に書いてある漢字、コラムの英語。

手元にある学べるものからひたすらに学んで行った。
しかし、ここで問題が発生。
私、1歳児らしいだろうか？
少なくとも字が読めて書ける上に簡単な算数出来る1歳児とか聞いた事がない。
母は私が初めての娘なので全然気にしてないけど普通では無いだろう。
でも今更1歳児っぽく振る舞っても逆に不信感を与えるだけだ。
寧ろ突き抜けて天才を演じた方が良い…のか？
待て待て、演じるとかそんな面白くない事したくない。
なら、もう素で出来る事を片っ端からやってこう！
天才？神童？知った事か。
好きな事して生きる！
でも今はまだ外には出たくない。
そう、私は今この瞬間新たな目標を立てたのだ！
3歳に公園デビューして注目の的になる！
ガキ大将に私はなるって感じだ。
でもそんな荒っぽい事は女の子だしやりたくない。
必要であれば暴力も致し方なしだが、基本的には言葉と私の美貌でなんとかしよう。
その為には知恵と力を付けなくては。
ハイハイは2歳まで継続。
計算ドリルや漢字ドリルは出来れば小学三年生まで終わらせたい。
あとは3歳でも可愛く見えるようにするために動きやすくかつ、可愛いオサレな服の調達と組み合わせの勉強だな。
忙しくなってきたぞ～！
でも親に迷惑を掛けるのは良くない。
出来るだけ安い服で出来るコーディネートを考えなきゃ。
さあ、3歳まで己の研鑽といこうじゃないか。
「深月、お出かけですよ～公園に遊びに行きましょうね～」
えっ、早くないですか？

第3話　【すなばのおやま】1歳児の公園デビュー【砂上の城】

という訳でやって来ました公園！
現在私は母さんに抱っこされてる。
いつもより視線が高くなってて早い段階で大人になった気分だ。
いやーそれにしても公園で遊ぶとか何年振りだろうなぁ。
そもそも前世であまり遊んでなかったしね。
「ほら、深月ここが〈こうえん〉って言うのよ～」
「おーえん？」
「そう、こうえんよ。ちゃんと言えて偉いわねぇ」
ごめん母さん知ってんだ。
取り敢えず知らない体を装っとこ。
この公園にはパッと見色々な遊具があった。
シーソー、砂場、ブランコ、滑り台、ジャングルジム。
まあ基本的なのは全部揃ってるみたい。
さて、何して遊ぼうか。
母さんに無理矢理と言ってはアレだけど連れてこられたのだから遊ばないとそれはそれでおかしいだろう。
だからといって、正直1歳児に出来る事なんてたかが知れてる。
精々、砂場で砂をほじくり返したり、水をパチャパチャ叩いたり、ブランコをゆらゆらゆっくり揺れるくらいか。
だが、しかし。
しかしだよ。
私はその程度遊びとは思わない!!
もっとハイレベル、かつハイセンスな遊びを私は所望する!!（1歳児）
ブランコで立ち乗りしてそこからジャンプしたり、ジャングルジムタイムアタックしたり、シーソーで物理法則を感じたりしたいのだ！
けど、そんなに危ない事が出来ないのも事実。

怪我でもしたら私も痛いし、母さんや父さんにも迷惑を掛けてしまう。
まして他界他かーいとか洒落にならないわ（自虐）
安全に、そして高難度な遊びをしたい。
ならばァ、答えは1つだァ!!
砂場にィ、お城を建てよオオオ!!!
え？それって安全なのかって？
城建てるくらい安全な遊びはないでしょ？
そうと決まれば母さんに小さいスコップとバケツが欲しい事を身振り手振りで伝える。
「あうー」ばしばし
「はいはい、どうしたの？」
「だぅ、ありぇ」スコップとバケツ指差し
「あー、あれはね、バケツとスコップよ？」
そう、そうなんだよ母さん。それはわかってるんだ。
私はアレが欲しいの、お願い、伝われぇぇ!!
身振り手振りでなんとか伝えようとする私。
あらあらと困った様に首を傾げる母。
私の愛は無事母に1時間後伝わった。

じゃあ早速作っていこうか。
と、思ったんだけどまた問題が。
砂の城を作る為にはまず、砂を適度に濡らさなきゃいけない。
幸い、手を洗う用なのか砂場の近くに水道はあるんだけど、1歳の私では水の入ったバケツを持ち歩く事はほぼ不可能に近い。
あと、蛇口が今の私には若干高い位置にある。
立てばギリいけるか？
バケツは……押すか。
私は水道の所までバケツを持っていって立ち上がり蛇口を捻る？
いや、回すとこの突起を押すように回してるから捻るじゃないな。
しかしまるでビクともしない。

は？いや蛇口硬っ!!
誰だよこんなガッチガチに閉めた奴?!
くっ、こうなったら！
「あーーー、う!!」ガンッ!!
ダバァ！っと勢い良く蛇口から水が流れ出る。
よっしゃぁ!!ぶっ叩いてやったぜぇ!!大量だァァァ!!
まあ、なんだっていいけど水は無事確保出来た。
いちいち立って捻るのは面倒なので水を入れたバケツをハイハイしながら押して砂場に運ぶ。
水を出しっぱなしにしてるから出来るだけ早めに戻らないと母さんに水を止められてしまう。
で、これを何往復か繰り返す。
母さんはこの私の珍妙な行動が、よく分からないが楽しそうだから良いみたいなニュアンスの視線を送りながら見守ってくれていた。
で、繰り返す事いっぱい（数えるのは１００越えた辺りから辞めた）。
砂場の砂が良い感じに濡れていた。
さあ、ここからは体力と時間との勝負だ。
一気に濡らした砂を城の形に固めていく。
私は１歳。
疲労が来れば速攻で寝てしまう。
早く、正確にバケツに濡れた砂を詰めるんだ!!
私はスコップを手に取ると大急ぎで砂を詰めて行った。

～三人称ｓｉｄｅ～
こうして砂場にはそれはそれは大きな城が建った。
その様はまるで世界文化遺産に登録されていてもおかしくない出来栄えだったそうだ。
のちに近くを通りかかった通行人に話を聞くと、
「なんか超ハイハイしてる赤ちゃんがありえない速度で建設してた」

との事。
大きなとは言っても大人の脛くらいまでの大きさの城だが、これを1歳、しかも女の子が作り上げたのだ。
彼女の母親は城の出来栄えについて褒めていたが、普通の1歳は城どころかまず、水すらも汲みに行けないだろう。
そこに突っ込まないのはやはり親は子に似るというか、子は親に似ているというか。
小鳥遊　深月、転生者。
彼女は確かにその片鱗を覗かせていた。

第４話【出会い】（砂の城）築くは苦労、壊すは楽勝【我が一生の幼馴染】

３日後。
私は再びあの城を建てた公園に訪れていた。
流石にあの城は崩れているだろう。
何せ城とは言え砂で出来ている。
水で作った即席の張りぼて城だしね。
だから私は、今日は別の遊具で遊ぼう。
そう思っていた時期がありました。
なんとあの城、
ご　健　在　で　し　た。
これには驚きを隠せない。
素で「ファッ?!」って赤ちゃんなのに出ちゃったもんね。
一体全体どういう原理であの城が３日間崩れなかったのか不思議でならない。
確かにこの３日間、一日中晴れ間が続く日だったけど風は普通に吹いていた。
だから砂の城が風に煽られて倒れてるとか思ってたんだけどいい意味で予想を裏切ってくれた。
でもホントになんで崩れなかったのか…
ハッ、まさかこれが前世チート?!
『砂で作った物を壊れ難くする』チートだと?!
そんな限定的なチートいらないわ!!
「まあ、深月ちゃんの作ったお城、まだ残ってるのね～凄いわ～」
母よ、それ以前になぜ残ってるのか疑問に思ってください。
「え?!あれ深月ちゃんつくったの?!!」
「そうよ～凄いわよねぇつーちゃん?」
「いや、まあ、凄いんだけどね。萌恵アンタそこじゃないでしょ。あといい歳してつーちゃん言わないでよ…」

「そうかしら～？ごめんね～翼ちゃん」
「ちゃんって…もういいわよ、アンタのゆるふわ加減には諦めてるから」
うちの母がすみませんお向かいさん。
先程の会話の中に母以外の女性が出てきたので、ついでに私以外この場の全員紹介してしまおう。
まず先に母、名前は小鳥遊萌恵（たかなしもえ）。
キラキラネーム感のある名前の私の母は、かなりの楽観主義者だった。
私がカーペットにスープをこぼしても、服をヨダレで汚したりしても、あらあらまあまあで片付ける。ちなみに汚れは一瞬で消えてた。
前述の通り、育児に関しては物凄く、家事と同時進行で私に教育もしようとした猛者だ。
え？それ普通じゃない？って思ったそこのあなた。
片手で料理しながら片手に数字を書いた紙を持って、これは1、これは2、足すと3で、これが3よ～って2歳に教える親を普通と言えますか。
あとすっごい雰囲気がふわふわしてる。
将来詐欺とかに騙されないといいんだけど。
ただ根性はめちゃくちゃある自慢の母だ。
で、もう1人の女性が羽柴翼（はしばつばさ）さん。
お向かいに住む家族のお母さんで私の母の同級生、友人らしい。
1歳の視力で見てもかなりの美人さんだ。
スタイル抜群のクールビューティ。
前世の私だったら求婚して、張り倒されるレベル。
既婚者だししないけどね。
ホントだよ??ミツキウソツカナイ。
「さ、湊士（みなと）。貴方も深月ちゃんと遊んでらっしゃい」
「うー？」
翼さんの息子、羽柴　湊士君。
私と同い年で、このまま行くと幼馴染になると思う。

１歳児ながら規格外のサイズで、１歳６ヶ月ながら９０ｃｍくらいの大きさをしている。でかい。
そして、お母さん似なのか顔が整ってる。
いずれはとんでもないイケメンになりそう。
仲良くしておいて損は無いね。ゲへへ（ゲス顔）。
さてさて、砂場に座る私と湊士君。
親交を深め合おうじゃないか。
「あー？だー！」
「うー」
「あうー」
「…」
コイツ、反応うっす!!
会話してる気がしない（そもそも会話出来る方がおかしい）。
どうしたものか…
私がうんうん頭を悩ませていると、ふと湊士君はこちらを向いてじーっと見つめてくる。
「……」
「…???」
ほんとに意図が分からない。
１歳児の考えてる事なんてまず分からないけど、意志を伝えようという気概が一切感じられない。
なんだ？私は試されてるのか…？
自慢じゃないが前世はコミュ力くそ雑魚だった私に、これ以上のコミュニケーションは無理だぞ。
はてさてどうしたものか。
しばらく試行錯誤しているとようやく湊士君が反応を示した。
私の作った砂城で遊びたそうにしているのがわかった。
ぺたぺた砂城の外壁を叩いている。
ん？いや待て？
叩いている？
まずい！１歳児の力とは言え砂城は頑丈じゃない！倒壊する！

「だえーーー!!!」
「えうっ!?」
つい焦って大声を出してしまった私にビビったのか、湊士君はそのまま城の壁をバチコン粉砕。
あ、という親側からの虚しい声が聞こえた頃には私の作った砂城は見るも無惨に崩壊していた。
私は努力が水の泡になったから、湊士君は砂城が崩れたから。
私達2人は大声でわんわん泣いてしまった。
これが、私と幼馴染になる湊士君との出会いである。
この出会いが後に色々凄い事の引き金になるのだが、当時の私は知る由もない。
だって1歳児だもん。
分かるわけないさハハッ。

第5話　【ここからは】幼女幼稚園に立つ!!【ようじょのターン】

砂城崩落事件から2年、私は3歳になりました。
2歳は特に何もありませんでした！
強いて言うならお向かいの湊士君と多少仲良く?なったのかなぁ?
あれ以降何度かお互いの家に行き来して遊んだりはしたんだけど…
だって彼、物凄く反応が薄いから何が良くて何がダメなのか全然分からないんだもの。
「みなとくんは、おかあさんすきー?」
「……?」
こんな感じ、薄いったらありゃしない。
お母さん悲しいよ！お母さんじゃないけど！
あ、でも砂場を見た時に少し渋い感じの表情はしてたな。
私の城を壊した事に思う事でもあるのかな。
私はあの時大泣きはしたけども特に気にしてないんだけどね。
やはり女の涙は武器なのか?!そうなのか?!
これからバンバン使ってこ（にやり）
そんな事はともかくだよ。
私は3歳になった。
そう、という事は幼稚園デビューって事だ!!
いやー楽しみだなぁ。
前世は特に楽しみだとは思わなかったけど、今の私ならきっとかけっこで1番とか、お絵描きが上手かったりとかでたちまち幼稚園界のスターになれるのでは?
そう思うともうね、ワクがムネムネしてヤバババイよホントに。
はい、日本語喋ります。
じゃ、ちゃちゃっと行っちゃいますか～

はい、という事でね！
幼稚園生活2ヶ月目という事なんですけど！
まあ普通に過ごしたよ普通に。
食べて遊んで寝て食べて遊んで学んで。
園児なんてこんなもんでしょ。
当たり障りのない園児ライフを送ってます。
あ、そうそう、私のお向かいさんの湊士君いるじゃん？
あの子もこの幼稚園来ててね～
もう、すっごいの。
年上の年中さんとか年長さんの女子にキャーキャー言われてんの。
実際にあった反応がこちら。
「みなとくん！あーそーぼ！」
「だめー！みなとくんとはあたしがあそぶのー！」
「むー！このどろぼうきつね！みなとくんはわたしのなのー！」
お前らマセすぎだろ?!
というか泥棒狐とかどこで聞いたんだよその言葉…
幼稚園児なのに昼ドラみたいな展開を見せられて彼女らの将来が若干心配になりました。まる。
同年代の子達も彼の秘められしカリスマを本能的に察したのかめっちゃ彼に構ってくし。
それを嫌がって私の所に来て周りから睨まれるまでがテンプレね。
と言うよりもこの状況自体が恋愛小説のテンプレ展開みたいな感じだな。
はーやだやだ、女の嫉妬って醜いねぇ～まあ今私女の子なんだけど。
あーあ、このテンプレ誰かぶち壊してくれないかなー。
そうだ！
私がやろう！
私も湊士君と同じくらい目立ってみよう！
前世では目立って叩かれる事を嫌って出来るだけ静かにしていた

けど、今の私にはこの前世の知識と鍛え上げた肉体（2年程度）がある！多少いじられてもまあなんとかなるでしょ！
なるようになるさ。
そうと決まれば、早速実践だ！
今日は確か園庭遊びがあった。
まあ、やるのは大抵鬼ごっことかだね。
それなら男の子と混ざってやった方がインパクト強いかな？
女子に後から変な目で見られるかもだけど、私が良ければ全て良し精神で生きていこう。
さらに、ついでに湊士君も混ぜよう。
やっぱりね？みんなでやった方が楽しいと思うし、湊士君も女子のおままごとに付き合うよりもこっちの方がいいでしょ！
折角鬼ごっこするんだし、人数も多い方がいいしね～
「だからね！みなとくん！いっしょにおにごっこしよ！」
「ん…」
こくんと小さく頷く湊士君。
同意を得られたところで、ではいつものアレをやろう。
私は徐に人差し指を天高く突き上げ、大きな声で決まり文句を叫んだ。
「おーにごっこすーるひっとこーのゆーびとーまれ！」
はいはーい！と集まる男子たち。掛かったな（悪い笑み）
何人かは私が女子なのを見て、「女子と遊ぶ男子はかっこ悪い」みたいな感じに参加しなかったが、それでも十分に集まってる。そういう奴らは後々参加したくなって参加してるからスルースルー。
でも分からないでもないんだよなぁ。
私も前世はそんな感じに女子と遊ぶのは出来るだけ控えてた気がする。
遠い昔の事だから殆ど覚えてないけど、女子と遊ぶ男子ってモテたんだろうなぁって今更ながらに後悔してる2週目の人生。
精一杯、女の子楽しませてもらいます。
私は集まったメンバーで円を組み、ジャンケンを始めながら周囲を

見渡してみる。
遠巻きに湊士君を見つめ、私が鬼ごっこ参加するのを不思議そうに見ている女子諸君。
この後何が起こるのか全く予想のついていない参加した男子諸君。
あー悪い笑みが出ちゃいそう。
ダメだ、まだ笑うな…！
そんな茶番は置いといて、じゃあ参加者諸君並びに観戦者一同。
私が本当の鬼ごっこを見せてやろう

第6話　【ようじよ】鬼ごっこだよ（真顔）【狩人と化す】

公正なジャンケンの下、私が鬼になった。
不平不満は無い、寧ろ好都合だ。
ルールは簡単、タッチ鬼。
タッチされた人が鬼になって、また鬼になった人が鬼じゃない人を追いかけてタッチする基本的な鬼ごっこ。
これが飽きるまで繰り返されるのだ。
…今思えばこれかなりの苦行だと思う。
だが今の私には、小さい子供特有の無限の体力がある。
あれなんで歳をとっていくに連れてあの頃の体力が減っていくんだろうね。子供は疲れを感じにくいのかな？
これをハイハイによって培われたバランス感覚と全身の筋肉、そして前世の意識によって最大限に生かす。
さて、これから追いかけていくのだが最初から飛ばすと、速攻で子供達は飽きてしまう。
それは主催者として本意じゃない。
でも参加者の子供たちにとっては鬼はやりたくないのが本音だろう。足の遅い子なら特に。
だから最初は良い感じに手を抜いて追いかけて、そろそろ男子連中が「適当に走っても捕まんないじゃん。つまんないの」って感じに飽きてきた所を一気に仕留める。
そう、仕留める。これは鬼ごっこじゃない。
戦いだ。
「じゃあ、かぞえるねー！・いーち、にー」
参加者は私を除いて9人。
のち2人が右に、3人は前、3人は左、で1人が後ろ。
狙い目は後ろの1人だけどそいつは湊士君だ。
実力が未知数な相手に勝負するのは得策じゃない。

ならば人数が多く、逃げにくい場所に移動した左を追うのがベスト。
「ろーく、しーち、はーち」
研ぎ澄ませ、全身の神経を。
アイツらは獲物、私の獲物。
「きゅーう、じゅう！」
瞬間、私は地面を蹴った。
右足を前に大きく踏み出し、腕を引く。
体は風になり、左の男子たちへと向かっていく。
彼らの表情がよく見える。
とてもギョッとした表情でこちらを見ていた。
３人のうち２人が左に、１人が右へ避ける。
１人狙いだなんだと言われるのは面倒なので２人いる方を追いかける事にした。
私は少しジャンプして体を１８０度反転させ、２人を追う。
もう少しで追い付ける。
片方が進路変更した！
「まてー！」
「うわ！こっち来た！」
うわってなんだうわって！
あーもうキレた。許さん。
地獄の果てまで追いかけよう！
私は彼を追い抜いて進路変更先にあったタイヤの遊具を右足で踏みつける。
ゲームで言う壁キックの要領だ。
その反動を利用して彼とすれ違うように手を肩へと軽く、しかし触ったとしっかり感覚が残るくらいにタッチした。
「タッチー！」
「あーやったなぁ！」
彼はタッチした私を追いかけようとするが、その時には私はもうそ

こにはいなかった。
ストライド走法で彼の前から逃げたからだ。
(※ストライド走法とは、逃走中のハンターが走る時に使うような奴だよ！直線距離を走る時に素早く走れるよ！でも曲がるのは苦手だよ！)
最初は飛ばさないと言ったな？あれは嘘だ。
いや、ついつい気持ちが昂っちゃって…これは反省しなきゃだな。
一方、私にタッチされた彼はポカンとしていたがタッチし返そうと追いかける。
だが、私のあまりの速さに追いかけるのを諦めたのか、別の人を狙いにいった。
いや、彼いい子だな。
鬼になっても文句言わないなんて。
この年頃の男の子って鬼になるとすぐ文句言うと思ってたんだけどね。
後でちゃんと名前覚えとこ。
で、逃げた先で湊士君と合流する。
「えへへーどう？たのしい？」
「うん、すごいはやかったよ。みつきちゃん」
いや別に私を褒めろとは言ってないんだけどなぁ。
まあ、褒められて悪い気はしないかな。
お礼は言っとこ。
「そうかな？ありがとう！みなとくん！」
「ん」
その後も何度か私は鬼を担当した。
あと湊士君も。
湊士君は走るのが苦手みたいで、中々タッチ出来ないでいたが、
私が男子達の逃げ道を誘導して上手く人を湊士君側に送ることで彼もタッチする事が出来た。
私が逃げる時、本気を出すとご覧のように全く捕まらないので、かなり手加減して走ってみた。すると、結構な回数タッチされたので、

どうやら足の遅い子も私をタッチして鬼じゃなくなったりしたから楽しめたみたい。
鬼ごっこって1人強い奴いるとそいつ永遠に捕まらないからつまんない時あるよね～。
喧嘩も無く、とても楽しい時間を過ごした。
いやー良かった良かった、やってみるもんだね。
なんか当初の目的を忘れてしまっている気はするけど楽しかったから無問題（ノープロブレム）！
ちなみにこの鬼ごっこの後、幼馴染を除く男子から、
「みつきちゃんにんじゃみたーい！」
「かっこいい!!」
「ねーさっきのタイヤびょん！ってやつおしえてー！」
と、強請られたり、
「…あれ？深月ちゃんって年長さんだったかしら」
と、先生が困惑の声を上げたのはまた別の話だ。

第7話　【ようじょ】あれ？待って、私何やった？【ガチ困惑】

やっほー！みんなー！元気ぃー？！
私も！元気だぞー！
はぁ…はぁ…
あーテンション上げて現実逃避してみたけどやっぱりちゃんと考えないとダメだよね。
うん、目を背けちゃダメだ。
私の身体能力について。
この間の鬼ごっこで私は空中で方向転換を決めたり、タイヤの反動を利用して相手をタッチしたりしてた。
けど、普通は有り得ない。
落ち着いて考えてみると私はまだ3歳だ。
3歳がこんなに運動神経が発達してるわけが無い。
天才と呼ばれる人間でもここまで出来る奴は、居たとしてもほんのひと握り。
そのひと握りに私が入ってるとは思えない。
てか、ひと握り？ひとつまみ？もうホントそんくらい少ないと思う。
別にこの身体能力がある事自体は問題無い、筈。多分。
いや、若干問題かもしれないけど。変な研究機関に目をつけられたりしないかなとか。
実際にそう言う機関があるかどうかは分からないけど。
でも問題なのはどうしてこんなに動けるのか。
…まさか、前世チート？え？砂固めるのじゃなかった？
もしかして本命はこれ？
うーん、あと心当たりがあるとしても生まれて歯が生え揃ってない頃からハイハイしようとしてたくらいしか思い付かない。
あれ？原因それ？

うーんわからん。ガチでわからん。
試しに今逆立ちして物事考えてるんだけど、そもそも女子で、しかも3歳が壁に足を当てないで逆立ちとか普通出来ないと思うし…
そんな風に色々ごちゃごちゃ考えてると、私が逆立ちしている所に湊士君がとぼとぼと歩いてやって来た。
なにやら雰囲気がどんよりと重い、これは何かあったかな？
わたしは1度自分についての思考をやめて湊士君に話しかける事にした。
出来るだけにこやかに笑って明るい空気を演出するのです…
にこーっ！
「あ、みなとくん！どうしたの？」
「…おんなのこがおままごとしよって。ぼくいやなのに」
そう言って湊士君は肩を落とす。よほど嫌だったのだろう。
しかし、あー、また捕まってたんだ。
イケメンは大変だねークソが。
てか湊士君、私の事人避けに使ってないだろうか。
別にいいんだけどね。それだけ私の事頼りにしてくれてるってことなんだろうし。好感度高いのは嬉しいしね。
でもそれで寄ってこない女子もなんなんだよ。
一体全体、私をなんだと思ってるのか。
猟犬？狩人？なるほど。
確実にこの間の鬼ごっこが原因ですねわかります本当にありがとうございました。
まあ確かに園児には少しショッキングな映像だったかな…？
いやでも私普通に追いかけてただけだしなぁ。
また思考に耽っていると、珍しく湊士君が私に話しかけてきた。
「みつきちゃんはなにしてるの？」
「うーん、かんがえてるの！」
「…なにを？」
何を…何を…園児に教えても分かるようなものなんだろうか？
えー、どうしよ。

言ってもしょうがない気がするけど…
まあ、隠す程の物でも無いし、湊士君、というかこの幼稚園にいる人たちはわたしが凄い動けるのは知ってるから言ってもいっか。
そう考えた私は湊士君に拙いながらも考えてる事を伝えた。
すると、とんでもない回答が返ってきた。
「筋質がいいんだと思う」
「え？」
ぱーどぅん？
きんしつ…筋質か？もしかして。
まさかの幼稚園児の口から筋質なんて言葉が飛び出すとは思わず、一瞬思考が停止する。
その間にも湊士君は流暢に筋肉について語っていく。
「筋質、もしかしたら筋密度って言った方がいいかな？筋密度って言うのは筋肉の中にどれだけ多くの筋繊維が入っているかを表す言葉なんだけど、多分みつきちゃんは他の子に比べて筋繊維が筋肉に沢山入ってるのかもしれない。この筋密度って言うのは例えばボディビルダーの人みたいな大きな筋肉じゃなくても筋密度を高めれば重いものを持ち上げたり力が強くなったりするんだ。ただ幾ら筋密度が高くても骨密度が低ければ筋肉に耐えきれなくて折れてしまうから、骨密度も……」
そこからしばらく湊士君のガチ保健体育の授業が次の先生の号令まで続いた。
確かに彼の説明を聞くに確かにそうなのかもしれないとは思うがその前に1つツッコミを入れさせて欲しい。
お前頭良すぎだろ！
え？何？4歳児が筋密度とか筋繊維とか。筋肉フェチか何かかな?!
てかいきなり饒舌になるね湊士君！
思わずポカーンとしちゃったよ。
しかも私の拙い説明でよくそこまで理解出来たね。
いやそれから…あーもうツッコミが追いつかない！

いつその知識を仕入れたのか、その膨大な知識をどうやって覚えたのだろうか。
少なくとも園児が覚えようと思って覚えられる知識ではないし、そもそも普通なら興味もわかないだろう。
もしかしたら湊士君こそが本当の天才なのかもしれない。
そう思ったとある昼下がりである。

第８話【数少ない】励まそう、幼馴染【シリアス回】

お遊戯会。
それは、幼稚園時代のイベントの１つ。
園児たちは先生の厳しい訓練を耐え抜き、自分の両親に自分が凄いんだよ！こんなに出来るんだよ！と、アピールするイベントである。
きっと終わったら、
「頑張ったね○○！今日はお寿司を食べに行こう！」
とか、
「凄いじゃないか！頑張ったな○○！ご褒美にお前の欲しがってた変身ベルトを買ってやろう！」
とか素晴らしいご褒美が待っている筈だ。
私？私は特に欲しい物は無いかなぁ。
母さんが喜んでくれればそれでよし！
マザコン上等！家族愛して何が悪い！
前世で親孝行出来なかったから、今世ではバリバリ孝行していく所存である。
よーし踊りも歌も完璧にするぞー！
それどころかアレンジもしちゃうぞー!!
私は意気揚々と練習を始める。
けど１人、教室の隅っこに蹲る奴がいた。
湊士君である。
何やってんだろ？また女子におままごと誘われたかな？
この間それで落ち込んでたしね。
でもそうだとしても少し雰囲気が違うような…
「湊士君、ほら、一緒に練習しましょ？」
「……」
先生が話しかけても彼は動こうとしない。
珍しい、普段なら素直に言うこと聞くのに。
その所為か先生も彼の扱いに困ってしまっているようだ。
クラスのみんなも湊士君が心配なのか自由時間になると積極的に

話しかけに行くが、誰も彼も黙殺されてしまう。
どうやら今日は頑固な湊士君らしい。
仕方ない、私が行くか。
何故かは知らないが湊士君は私には色々話してくれる。
まあ、みんなよりは付き合いにアドバンテージがあるからね。
幼馴染って素晴らしい。
私は湊士君の側まで歩いていくと、湊士君は少し顔を上げてこちらを見る。
やっぱり私と話す気はあるらしい。
それならそれで好都合なので、そのまま話しかけることにした。
「みなとくん、げんきないね？どうしたの？」
「……おゆーぎかい」
「おゆーぎかい？」
「うん、おかーさん、こないんだって」
え？マジで？翼さん来ないの？
あの人息子大好きだから来ると思ってたんだけど…
「ぼくに、いもーとができるって。だからちょっとのあいだびょーいんにおとまりしないといけないって」
あー、なるほど。
それは確かに来れないなぁ。
でもまさかこの時期に入院って時期悪いなぁ。
多分入院するつもりはなかったんでしょうね。
まあ一定数には入院して、そこで産むって人も居るらしいけど。
取り敢えず翼さんにはお盛んっすねとだけ伝えとこう（最低）言わないけどね！
今は湊士君のフォロー最優先だ。
でもお母さんが来れないだけで湊士君のお父さんは来れるはずだ。
あれだろうか？お父さんいやーな感じなのかな？
同性の親な上に、仕事であまり家に居なかったりする父親ってちょっと怖いよね最初の頃。
「じゃあ、おとーさんは？」

「ぼくのおとーさん、おしごといってていそがしいって」
は？（威圧）
まさかとは思うが湊士君の親父さんは働けば働いただけ家族が楽になるとか思ってる古い人なわけ？
そしてさらにまさかとは思うけど仕事ばっかりで家事してないわけ？
もしそうなら仕事場に突撃するまであるんだが？仕事場知らないけど。
「…みなとくん、きょうあさごはんたべた？」
「うん、おとーさんがつくっておいてくれたの」
あ、さすがにそこはやるのね。
ですよね。
それすらしてなかったらドン引きどころか怒りに任せて何するかわからなかったよ。
でも、それなら他の家事も夜帰ってきたらやってそう。
てゆーか仕事忙しいってだけで来ないとは言ってないんじゃ…
湊士君の口数が少ないのもあって大事な情報が私に伝わってない気がしてならない。
多分お父さん、仕事から帰ってきたら家事やってるし、なんならほとんど家の事やってるんだろうな。
あの人ちょっと会った事があるけど、両親揃って子供大好きだから、たかが仕事が忙しいだけで子供を構わなくなるなんてことは無いはずだ。余程務めてる会社がブラックじゃなければ。
でも湊士君だってまだ幼稚園児だ。
あんなすごい知識量を披露しても彼は普通の幼稚園児と何ら変わらない心を持っている。
心細くなっちゃうのも仕方ないよ。
よし！こういう時こそ！ちょっと強引な幼馴染の出番ってね！
私は湊士君の両肩に手を置いて、目線を合わせて話しかける。
「みなとくん、だいじょーぶだよ！おかーさんはこれないかもしれないけどおとーさんがみにきてくれるよ！」

「…でも」
「でもじゃない！だいじょーぶだから！もし来なかったらわたしがみなとくんのおとーさんおこるもん」
「おこるの？」
「うん！いーっぱいおこる！にどとこどものはれすがたをみのがさないようにからだにたたきこんであげる！」
「よくわからないけどこわいからやめて」
やらないよ冗談だよ冗談。
そんな風に言ってあげると安心したのか、にこりと笑って「ありがとう」と言って遊んでるみんなの方へ駆けていった。
その後のお遊戯会の練習にもキチンと参加していて、先生も安心したようだ。
いやー良かった良かった！
あの笑顔、破壊力凄いなぁ……
はーあ、顔が暑い。

第9話　【親来ないと寂しい】お遊戯会、開催【来たら来たで恥ずい】

私と湊士君は、あのしょんぼり湊士君事件以降、お遊戯会の練習をひたすらに頑張った。

私は元々頑張ってはいたけど、熱の入った湊士君を見てるとさらに頑張りたくなったんだ。

思わずその場でブレイクダンスを踊りだす位には気合いが入ってた。

そしたら、先生が「深月ちゃん、危ないから止めなさい」と、割と本気で止めてきた。

反省。

そして湊士君。

彼は練習を途中参加したので、かなり周囲よりも出遅れてしまっている。

着いて行けるか心配だったが、杞憂だった。

歌も担当のセリフもバッチリ覚え、寧ろより上手く、より素晴らしくとクオリティをどんどん上げていく。

やはり頭の出来が違うんだろうね。

他の子も各々練習を重ね、私達年少組は上の年中や年長組にも一目を置かれる存在となった。

そして、今日がそのお遊戯会当日。

親の席を見ると、既に席はいっぱいになっている。

私の母はカメラを構えて、今か今かとその時を待っているのが見えた。

休日、湊士君の家にお邪魔した時にたまに会う彼のお父さんは、まだ来ていなかった。

少し湊士君の顔が陰った。

私は湊士君の手をそっと握る。

「だいじょうぶだよ」

「…うん」
彼の表情が少しだけ明るくなった気がした。

私達年少組の部は、このお遊戯会のトップバッターを務める。
そこから順に年中、年長と年齢が高い順に発表する。
だから、そろそろ湊士君のお父さんは席に座ってなくても来てなきゃいけない。
私も遠目から探してはいるが、それらしき人は見つけられていない。
『それでは年少組の皆さん、お願いします』
アナウンスが入った。
私達の演技が始まる。
先生達が用意してくれたポリ製の衣装を身に纏い、私達は踊る。
キレッキレに。
観客席がざわめいた。
「今やってるのって年少さんだよな？」
「すっごいキレのある動きしてるわね…」
「ひとつひとつの動きに無駄が無いというか」
そりゃそうだ。
私達は先生がいない自由時間でも練習してきたのだから。
踊りについては私が、最後の合唱は湊士君がみんなに教えてる。
最初は不平不満を口にしていたが、もしかしたら欲しいの買ってもらえるかもとか、好きな物を食べさせてもらえるかもとか言って女子は聞かせた。
男子は、女子の圧力と湊士君に任せたら（あとちょっと挑発した）、渋々ながらも練習に参加してくれた。
お陰でステップや振り付け、途中の移動なんかは全て体に染み付き、迷いなく踊る事が出来ている。
先生は少し引いてたなぁ。
ダンスは終わり、次は合唱だ。
これについては湊士君に丸投げした。

彼なら3歳でも上手くやってくれるのでは？という謎の信頼の下任せてみたら、案の定上手くいった。
統率を私を見て学び、歌の音程を先生のピアノを聞いて覚え、自分なりに解釈したものを他の子に分かりやすく伝えていた。
歌を歌うのも音程が合うだけで、かなり上手く歌ってるように聞こえるものだ。
「…ホントに年少さん？歌めちゃくちゃ上手いんだけど」
「私の子供が年少の時、こんなに上手かったかしら…」
なんだかんだで歌も終盤に差し掛かってきた。
未だに湊士君のお父さんの姿は見えない。
私もやはり来ないかと思ったその時、
「湊士ッッッ!!」
彼の名前を呼ぶ声がした。
湊士君も私も聞き覚えのある声だった。
声のした方を見るとそこには、走って来たのか汗だくで、スーツを着た湊士君のお父さんが大きく手を振っていた。
歌うのは辞めないが、嬉しそうな湊士君。でも、少し恥ずかしいのか顔が赤くなっていた。
いやー美少年の赤面とかメシウ…ごほん。
良かったね湊士君、やっぱり君のお父さんは湊士君の事が大好きなんだよ。
この合唱は私達が今まで歌ってきた中で1番上手く歌えたと思う。
こうして私達のお遊戯会は幕を閉じたのだった。

帰り道、羽柴親子と私達小鳥遊親子は一緒に帰ることとなった。
幼稚園は家から近いし、何よりお向かいさんだからね。
湊士君のお父さん、羽柴徹（はしばとおる）さんから聞いたが、どうやら湊士君の妹が今年中にはもう生まれてくるらしい。
だとしたら私達と3歳差になるのか。
小学校はもしかしたら一緒になるかもしれないね。
あとは私の母と娘息子自慢しまくってた。

恥ずかしいなぁもう。
「みつきちゃん」
ふと湊士君に呼ばれる。
「ほんとうにありがとう。ちゃんとおとーさんきてくれた」
「ううん、わたしじゃないよ。みなとくんのおとーさんがみなとくんのことだいすきだからきてくれたんだよ！」
私は別に何もしてない。
ただ寂しそうにしてる幼馴染を励ましただけだ。
「それでも、ぼく、うれしかった。だから、ありがとう」
そう言われたら、お礼を受け取らない方が失礼だなぁ。
「わかった！どういたしまして！」
「うん」
私と湊士君は、手を繋ぎながら仲良く帰路に着く。
夕焼けが私達と空を、紅く染めた。

第１０話【八艘飛びを】剣道体験１日目【決めるようじょ】

月日は流れ私、小鳥遊深月は６歳になりました。
湊士君の妹を抱っこして和んだり、クリスマスに私の父が家族でクリスマスを過ごす為に中国から日本海をスーツで泳いで帰って来たり、幼稚園の遠足で迷子になって森の中を駆け回ってたら近隣の人で『あの森には妖怪が居る』って噂されたりしたけど、特に変わった事は無い。
無いったら無い（鋼の意思）。
背も伸びて、体も前より動くようになり滑舌も昔に比べてハッキリ喋れるようになった。
最近は幼稚園で年長の立場になったので、下の子達に気を使うようになったかなぁ。
さて、そんな事よりもだ。
突然だが、私は前世で剣道をやっていた。
なんでかと言うと体作りのためである。
昔の私はあまりにも運動神経が悪く、かけっこだとビリだし、サッカーでもボールをろくに蹴れないし、バスケだってドリブルの拙さと言ったら目も当てられないものだった。
原因は伸び続ける身長に運動神経がついて行かなかったから。
ようやく１７０ｃｍの体の動かし方を覚えたと思えばあっという間に１７５ｃｍになって、若干打つタイミングや蹴るタイミングがズレたりして、完全に自分の成長に振り回されていた。
そんな風に高い身長を持て余し、何とかこの背を生かしたスポーツが出来ないかと悩んで居た時、剣道に出会った。
別に強くはなかったが弱くもなかった。身長というのはそれだけでアドバンテージなのだが、生憎技術と身体能力が追い付かなかった。
しかし、今世はどうだ。

この5歳とは思えないアホみたいな身体能力と、意識的に覚えている剣道技術。
これがあれば前世よりももっと強くなれるのではないか？
もちろんそう甘くは無いのは分かってる。
でもそこに少しでも可能性があるのなら…私はやってみたい！
「という事でおかあさん！剣道やりたい！」
「あらあら～何がという事でなのかはわからないけど良いわよ～」
さっすがマイマザー話が早いぜ！
レッツゴー道場!!

「私がこの道場の師範をやらせてもらってる高峰（たかみね）です。本日は体験入門ありがとうございます」
「いえいえ～娘がとても剣道に興味を示していたもので～」
「息子も楽しみにしてたみたいなので、本日はよろしくお願いします」
どもども、小鳥遊深月でーす。
現在、私は道場に来ている。
ちなみに湊士君も一緒だ。
だけど今日は見学するらしい。まあ、湊士君の場合は1度みたら忘れないタイプだし、明日には今日やったすべての内容を丸々出来るようになってるだろう。
あぁ！懐かしいこの匂い！
皮に汗が染み込んだのを消臭剤で無理矢理誤魔化そうとして失敗したようなこの匂い！
相変わらず臭いが、最早この匂いすら愛おしく感じてしまう。
素晴らしき道場！最高だ！
「じゃあ早速だけど竹刀を持ってみようか。はい」
そう言い高峰さんは私に竹刀を渡してくる。
小学生の女子用の竹刀だ。短くて取り回しがよく、男子用よりも軽い。
あー本当に懐かしいなー！
えっと左手を下に柄を完全に隠すように握って、小指と薬指に力を

入れる。
　で、右手は添えるだけ。
　雑巾を絞り、卵を握るように。
「握り方だけど左手を…あれ？出来てるな」
　右足を前に、左足を後ろに。
　左足の踵を少し浮かせる。
「足も……出来てるな」
　背は伸ばして、胸を張る。
　目線は前に、顎を引く。
　手の高さは中段だから腰の位置！
「構えも割と様になってる…ホントに初めてなのか…？」
　その後もすり足（左足を右足の前に出さず擦って移動する歩法）したり、素振りしたりしたが特に先生に何か駄目出しされることはなかった。
　やっぱり剣道体験だからか優しいなぁ。
　そして今日最後の練習だが打ち込み稽古をさせてくれるらしい。
　願ったり叶ったりだ、私が今どれ位出来るかこれで分かる！
「さあ！打ってこ」
「ヤァアアアアアアア!!!!!!!!!!」
「え？」
　面を開けてくれている。ならここは真っ直ぐ面を打とう。
　力が足りないから踏み込む時に自分の体重を踏み込む足に掛けて思いっ切り踏み込む。
　ダァン！という私の踏み込みの音が道場いっぱいに響き渡る。
　そして左足で体を加速、面目掛けて竹刀を最小限の動きで振り下ろす。
「メエエエエエンン!!!!!」
　スパァンと綺麗に決まった。すり足ですれ違って振り返り、残心（相手にまだ隙を見せていないと示す為の行為の事）を取る。
　先生がこちらを向く。
「ヤァア!!」

「ちょ、おい！まだ開けてないぞ！」
突進するが、しまった先生はまだ面を開けてない！
仕方ない、こうなったら、１度左足を前に出す。
右足で左側に跳ねて体ごと先生の竹刀を躱す。
で、左足で着地してそのまま左足で体を前に押し出す。
この時右足はまだ浮いたままだからそのまま踏み込みに使う！
この間０．５秒！
左から面！八艘飛びだ!!
「八艘飛びィ!!?!!」
「めぇぇん!!」
スパァン!!!
小鳥遊深月６歳。
剣道始めて１日目に八艘飛びをかます。
先生にすっごい勧誘される事になった。

第11話【立体機動】剣道体験2日目【ようじょ】

剣道体験2日目。
私は何故か剣道体験入門なのに、普通の道場メンバーの皆さんと練習に励んでいた。
道具一式全部借り物だよ！
あ、胴空いた。
ダァン！
「どおおおお!!!」
「あっ」
「胴アリ！」
1本取れた！やったね！
ちなみに今やってる稽古は『一本勝負』の勝ち抜き。
相手から一本取って、取られた人は並び直し、取った人は次の人と1本取るまでまた試合。
これを時間まで繰り返す稽古。
勝ち癖を付けられるし、なにより勝ったら永遠とそこに立ち続けなきゃいけないからかなり体力がいる。
勿論、待ってる人が暇になるっていう短所もあるけどここでは3列くらい作ってるから待ち時間はそんなに無いし、非効率的ではない。多分。練習メニューとか考えた事ないからわかんないけど。
そうそう、湊士君だけど今彼は私が昨日こなした練習内容をやってる。
かなり真剣な表情でやってる。
てゆーかでかくなったんだよなぁ湊士君。
今身長１２０ｃｍだって。
私なんかまだ９６ｃｍしかないのに…
神よ！どうして私に身長を与えて下さらないのですか！
…転生する前に無礼な事を言ったからかな。
なんかそんな気がする。
とりあえずマジごめんって心の中で謝っとこ。

こいつの竹刀邪魔だな。
八艘飛びして面打と。
ダッダァン！
「めええええん!!!」
「…え？」
「面ッあり!!」
私、これ身長大きくなれるのか、だんだん心配になってきたなぁ。
まあ？私女子だし？小さくても可愛いで済まされる性別だから？
気にならないよ！（半ギレ）
お前もでけーんじゃ！
飛ぶ！
ドォウン！
「メエエエエエンン!!!」
「ぎゃふん」
「面ッッッありぃぃぃ!!!!!」
「おい、加藤君ボッコボコだぞ」
「アイツめちゃくちゃ強いぞ」
「加藤君１１６ｃｍあるのに面で勝ってたよ」
「やべーなアイツ」

１本勝負も終わり休憩に入る。
すると、湊士君も休憩の時間なのかこっちに歩いてきた。
「湊士くんお疲れ！大丈夫？」
「ん、大丈夫。みつきちゃんもお疲れ様」
「ありがとー！」
お互いに労い、湊士君は私の隣に腰を下ろして水筒を飲む。
しかし、彼の顔には少しも汗が浮かんでおらず、涼しそうな顔をしていた。
ホントに湊士君名前から容姿から何まで爽やかイケメンだよなぁ。
「湊士君は全然疲れてなさそうだね、私はへとへとだよー」
「嘘、みつきちゃんだって汗の量が少ない」

うわ、バレてーら。
確かにまあそこまで疲れてはない。
やっぱり身体能力が前世よりも上がってるせいか、疲れない体の動かし方が分かるんだよなぁ。
「あはは、やっぱり湊士くんにはバレちゃうか」
「でも仕方ない。みつきちゃんは他の子よりも凄いから」
「そんなことないよ、湊士くんだってすぐに上手くなるじゃん」
「でもまだ追いつけてない、絶対に追いつく」
「ま、負けず嫌い…」
湊士君の意外な負けず嫌いを見ながら思う。
その言い方は何か誤解されそうだなぁ、と。
凄いのは私じゃなくて前世チートなんだけどね。
言ってもしょうがないし、前世チートかどうかはわかんないけど。
何せ体の動かし方を知ってるってだけで実際に出来るかどうかはわからない。
私が今前世チートって呼んでるのは、前世に剣道をやっていた事を覚えている。それこそがチートだと呼んでる。
でも知ってるだけと出来るのは違うから、前世チートとはまた違うのかなーと思ったり。
まー八艘飛び出来ちゃった時点でチートじゃないって言うには甚だ疑問が残るけど。
さて、そろそろ体動かさないと体冷えちゃうな。
「湊士くん！一緒に素振りしよ！」
「うん」
私は湊士君と一緒に並んで竹刀を構える。
ちらりと隣を見てみると、湊士君の構え方が最初の時よりも綺麗になっているような気がする。
上達早いなーなんて呑気に考えながら私は竹刀を振り上げた。
この後めちゃくちゃ素振りした。

さて、練習の最後は打ち込みだ。

先生に向かって開けてくれたところにバッシバシ打っていく稽古。
さあ、私の番が回ってくる。
先生は私と向かい合うと右手を少し左にずらそうとしているので、篭手を打つ。
竹刀が篭手に当たると面が空いてるので続けて面も打っていく。
で、振り返ってすぐすり足で近づいていく。
先生は面を空けてくれたが、少し屈んで面を空けた。
恐らく私でも届く様に打ちやすくしてくれたのだろう！
ふざけんな！試合でそんな事する奴がいるか！というか屈むとか身長低い私に対して嫌味かこの野郎！（相手の方が歳上なので言わないが）
少しカチンと来た私は、先生と遠間（竹刀の先と先が触れ合う距離。めちゃくちゃ遠い）から一気に近付く。
「ん？」
「ヤァァァ!!」
で、一気に上に飛ぶ！
先生は大体身長１７０ｃｍ後半で屈んでいるから頭の位置は１１０ｃｍ位。
私の目線はその上の世界を見ていた。
面に竹刀を当て、体の重心を前にして、着地点を飛んだ位置から少し前に落とす。
私は着地した後先生に向かって残心。
先生は私を見てポカンとしていた。
ドヤァァァ!!!

第12話【ようじよ】剣道体験3日目【縮地擬き体得】

3日目だよ!!
今日は湊士君と一緒に道場へ歩いて向かっている。
ちなみに、私達が剣道を教わっているこの道場は少し遠いが、家から歩いて行ける距離にあるのだ。
どうやら湊士君のお母さん、翼さんは現在、妹ちゃんのお世話が忙しいらしい。
私の母に息子を頼むと、涙ながらにお願いしてた。
いや、今生の別れでもないんだから落ち着いてよ翼さん。
この人も大概残念美人だなと思いました。まる。
「ねぇ、深月ちゃん」
「どうしたの？」
不意に私の隣を歩いている湊士君が私に声を掛けてきた。
「どうして、深月ちゃんは剣道やろうと思ったの？」
…なんと答えたらいいのやら。
生前やってたから？
通じないだろう。
何となく興味が沸いたから？
なんかふわっとした理由だなぁ。
うーん、うーん。
「なんか剣道ってカッコイイじゃん！」
考えに考え抜いた結果、結局年相応にふわっとした理由になった。
精神年齢的に悲しい。もっとマシな理由はなかったのか。
というより、女子が剣道カッコイイと思っても、自分からその世界に突っ込んでいくだろうか普通。
心の中では冷や汗をかいていたが湊士君は納得したようで、
「そっか」
と言ってそのまま歩き出した。
聞いといてその態度はなんか釈然としないんだけど…
まあ、湊士君が納得したのならそれでいいや。

先を歩く湊士君に追いつくように少し駆け足で彼の隣に走っていく。
後ろでお母さんはなんかニコニコしながら「あらあら」とか言ってた。
変な勘違いされてそうだけど否定したらそうですと言っているようなものなので敢えて黙っておく。
湊士君と私は家族みたいなものだ、そういう仲になる事は今後一切ありえないだろう、なんて考えながら。

私は今、悩んでいる。
何を悩んでいるかと言うと、速さが足りないのだ。
これだけ聞くと「は？」ってなると思うので具体的に言おう。
速さが足りないのだ（変化なし）
もっと詳しく言うと、前回の稽古で私がバッシバシ1本取ってた相手が学習したらしく、私の八艘飛びの射程外から打ってくるようになったのだ。
私は身長が小さいので、相手の間合いに合わせてしまうと竹刀が相手に届かない。
かと言って私の間合いに入れば、相手はこれ幸いと打ってくる。
カウンターを決めようと思えばやれるのだが、今はまだ反射神経に体が追いついていないから、上手く合わせる自信が無い。
ならどうするか。
そうだ、縮地だ！
縮地をしよう！
だが、やり方が分からない。くそ、こんな事なら前世でやり方研究しとけばよかった。
縮地ってなんだろう（哲学）。
相手にめちゃくちゃ高速で間合い詰めてくイメージがあるんだよなぁ。
なら、前に出した足が地面に着く前に後ろの足を前に出せば、それは縮地の亜種では無いだろうか？

果たしてそんなのが出来るだろうか。
いや、やれる。今の私なら！
運動能力が前世より爆上がりして、体の軽い今なら！
ここで軽く説明。
剣道において1本を取る為には部位に当てるのは最低条件として、他3つの条件を達成しなきゃいけません。
1つ目は掛け声、やぁ！という掛け声の後に面、篭手、胴の打つ場所を竹刀で叩くと同時に大声で叫ぶ事。
2つ目は踏み込み、右足で床を思いっ切り踏みます。
3つ目は残心、打ち終えた後に相手の方を振り返る。
この3つが必要なんだよ！
それを踏まえて縮地亜種をしようか。
じゃあ、手順1。
左足を前に出しまーす。
「ヤァァァ!!」
「（あれ？小鳥遊のやつ、左足が出てる。やっぱり剣道初めてなんだ）」
手順2。
後ろの右足で前に飛び、左足を浮かせまーす。
「（近付いてきた！ここで面を打とう！）ヤァァ!!」
手順3。
浮いた左足が、床に着く前に右足を前に出しまーす。
あとは左足が着いた瞬間に床を蹴って、前に飛びながらふみこむだけです。
「え?!近」
「どおおおおおお!!!!!」
スパン！と竹刀が防具を打つ音が綺麗に鳴る。
「……無理」
試合相手である彼（加藤くん）のそんな呟きは、私の耳から左から右に抜けていった。

～三人称ｓｉｄｅ～

「９８……９９……１００」
ぶん、ぶんと空を切る音がする。
彼は静かに竹刀を振っていた。
彼女は今も練習で大暴れしている。
横に飛び、上に飛び、時には２歩を１歩で飛び。
彼は知っている。
自分に彼女と同じ事は出来ないと。
だが、彼は彼女と対等でありたいと幼いながらも考えていた。
何故自分がそうでありたいと思っているのかはモヤッとしているが、そうする事で自分の中で何か納得がいく気がした。
ならば、どうやって彼女と同じ場所に立つか。
賢い彼は１つ閃いた。
今の彼女を見ていると、その攻撃を受けきれているのは自分を指導してくれる先生しかいない。
同年代で彼女の技を受け止められる人物はここにはいない。
ならば……
彼は素振りをしながら彼女の一挙手一投足を観察し始めた。

第13話【ダイアモンド？】剣道体験4日目【幼馴染】

私は今、とんでもない光景を目の当たりにしていた。
「ハア…ハア…ハア…ハア」
「……」
息を切らし、這いつくばる少年と、それを無言で見下ろす我が幼馴染。
確かに今回の結果を招いたのは相手が悪い。
それにしたって今の状況はおかしい。
え？人の事言えないだろって？
私は常識の範囲内でやってるから平気平気。
さて、どうしてこうなったか回想入りマース。

数時間前…
今日から湊士君も一緒に、普段の道場でやってる練習に参加する事になった。
湊士君は教えたらすぐにそれを学び、会得するので、剣道体験で教えられるのは全部教えてしまったようなのだ。
かと言ってじゃあ剣道体験を終わりますというのも味気無いし、折角だから、私も実際の練習に参加してるから一緒にやってみないかと先生が湊士君に相談してみたところ、本人も是非参加したいとの事。
という訳で湊士君も一緒に練習に参加し始めたのだが、彼の成長は予想を遥かに上回るレベルであった。
何しろこの幼馴染、体力おばけなのである。
例えばすり足の練習で、普段使わない様な筋肉を使った動きなので初心者は普通そこそこに疲れる筈なのに、汗の一つもかかずにこなし、素振りも始めたばかりとは思えないほど綺麗に振っていて、正直周りの子達よりも素振りの姿勢が綺麗で、その姿勢をずっとキープしていた。
綺麗な姿勢を保ち続けるにはやはり体力がいる。
要するに湊士君はとんでもない体力量をしているのだ。

ただ湊士君、少し欠点がある。
それは技の練習の時だ。
「……面」
パスン
「はいはい声出せ羽柴！声が小さいぞー！」
彼の寡黙な所が裏目に出た。
湊士君は声が小さく、踏込みも甘いので1本に繋がるような技が打てていなかった。
仕方ない。何しろ初心者なのだ。
普通の初心者は八艘飛びをかましたり、面が届かないからって30cm程垂直跳びしたり、縮地亜種をしたりしない。
寧ろ、湊士君が普通なんだ。
しかし、私はここで気付かなかった。
いや、湊士君が普通であると思い込んでしまったがために気付けなかった。
湊士君の異常とも言える強靭な体力の持ち主であると見抜いていながら、頭がいい事を知っていて尚、私は湊士君の本当の狙いに気付かなかった。
気付いた所で何か変わっただろうか？
きっと変わらないだろう。
まあ、相手を私がする位は出来たと思う。
恐らく湊士君があの戦闘スタイルを貫くなら今後、試合では一切勝てないかもしれない。
だが、負けもしないだろう。
基礎練習が終わり、実践練習に移る。
今日は実際の試合の様に決められた場所の範囲内で時間いっぱい打ち合う稽古だった。
小学校にもなってない幼稚園児だってやっているのだ。ルールを体で覚えるための練習でもあるのだろう。
剣道には白いテープで囲まれた、決まった範囲のフィールドがあり、そこから出ると反則とみなされる。

ちなみに反則は2つ取ると1本相手に取られたことになる。
だから今自分がどこに立っているのかという位置把握も剣道の大事な要素の1つだ。白線ギリギリのところで後退しながら攻撃すれば反則になってこちらが不利になってしまうから。
それをしない為の練習なんだろう。
何人か通してやっている内に湊士君の番が回ってくる。
私は心配だった。
あの寡黙で温厚な彼がこの稽古をやり遂げる事が出来るだろうかと。
そんな心配を他所に稽古開始のブザーが鳴る。
そのブザーが鳴ると同時に湊士君の相手は面を打ちに行き、
湊士君の竹刀捌きによっていなされた。
「え？」
相手の彼も困惑していた。
何せ彼は切り落とす様な大振りではなく、当てるくらいの最小限の動きで面を打ったのにも関わらず、スルッと床まで竹刀が振り下ろさせられていたのだから。
その物理法則を完全に無視したような現象に私も驚きを隠せなかった。
その後も湊士君はいなし、躱し、防ぎ、見切り、最終的には相手が竹刀に掛けているの力を利用して相手の手元から竹刀を弾き飛ばしたりしていた。
ここで冒頭に戻る。
「ハァ…ハァ…ハァ…ハァ」
「……」
「……ええ」
私はドン引きした。
周囲もざわついていた。
え？あんなに当たんないのなんで？
一体何をどうしたらそうなるのか頭の悪い私には理解出来なかった。

いくら相手が小学生や幼稚園児だからといって、1発も当たらないなんてことはない。
むしろ初心者であればあるほど軌道が読みにくくてまぐれ当たりがあることが多い。
それすらも当たらない。面や小手おろか防具の何処かにもかすることすらない。
結局その稽古の間、湊士君は1回も面などを決める事はなかったが、その圧倒的な防衛力を周囲の人間に見せつけた。
絶対に1本取れないが、絶対に攻撃の当たらない選手。
防御力極振りのイケメン幼馴染、羽柴湊士が爆誕した！
…え？私、いつかアレと勝負すんの？
やだなぁ……

第１４話【攻めのようじょ】剣道体験５日目　ＶＳ幼馴染【受けの幼馴染】

こんちゃーす！深月だよ！
今日は剣道体験の最終日！
体験入門は今日でお終いだから、このまま続けるか辞めるか決めないといけない。
でもまあ、私は続けようと思ってる。
適度な運動は大事だし、あと剣道やってる女子は綺麗な人が多かったという前世の経験から、続ければきっと私も美少女になれる筈。
いや、なれる（確信）
湊士君も続けるらしい。
「深月ちゃんがやるなら、僕もやる」
って言ってた。
別に私を判断材料にしなくてもいいのに…
まあ本人はやる気があるみたいなので、駄目出しするつもりは無いけど。
やる気があるのはいい事だしね。
で、さっきも言ったように剣道体験最終日なのでというか総集編というか。
先生がどうやら私と湊士君の実力を見てワクワクしちゃったみたいで、実践練習を多めにやるそうだ。
やるのは１本勝負。
１体１の試合形式で、先に技を１本有効にさせた方が勝ちというルールで行う、本当の試合に１番近い稽古。
あれだね、２日目あたりに私がやってた稽古だね。あれ？３日目だったかな？
まあそれはそうとして。
ついでに小学生の大会に参加させる選手の選抜も行うので丁度いいと、先生言ってました。

成程、それは分かりました。
ですけど先生。
何で私と湊士君が1本勝負する事になってるの??
一応私も湊士君も初心者って扱いのはずなんだけどなぁ。
まあ知ってるよ？先生さっき、
「2人とも今日までの練習で皆と同じ位強くなってる。せっかくだし、2人で1本勝負やってみたらどうだ？」
って言ってたからね。
まあ、攻撃の私と防御の湊士君のほこたてが見たかったのかなぁと思ってるけど。
実際そう思ってそう。
仕方ない、湊士君には悪いがパッパと終わらせてしまおう。
注目されるのは別にいいけど、興味本位で対戦相手に知り合いぶつけられるのはなんか違う気がする小鳥遊深月6歳の秋。
だけど正直、本気出さないと湊士君に勝てないと思う。
あの化け物染みた体力と謎の強固な防御力。
あれを突破するには私の今出来る全部の技能を持ってしても抜けるか怪しい。
しかし、やらねば分からないのも事実。
「じゃ、湊士くん。やろっか」
「ん」
私と湊士君は開始線まで進む。
四方を9mの白線で囲まれた場内で、私達は竹刀を構え向かい合った。
「始めッッッ!!!」
試合開始の掛け声と共に私は弾丸の様な勢いで湊士君へ突っ込んでいく。
防がれるなら！反応できない速度で攻撃すればいい！
スピードイズジャスティス！
だが、その思惑は彼にはお見通しだったようだ。
面を狙った竹刀の軌道を見事に受けて逸らされる。

湊士君も負けじと此方に打ってくるが、どうにも1本にはならないものばかりだ。
だが、万が一のまぐれ当たり、という事が無きにしも非ずなので射程範囲から縮地亜種で離れる。
私と湊士君は試合開始直後の距離関係へと戻った。
そんな中は私は歯噛みする。
一撃で決めきれなかった。
割とダメ元な所はあったがここまで完璧に防がれるとは思わなかった。
ならば、ともう一度縮地亜種を使って距離を詰めようとする。
しかし、驚きの事態が発生した。
確かに私は湊士君との距離を詰めに行った。
なのに距離は少しも変化しなかった。
「(……まさか)」
学んだの？私の技を使うタイミングとその移動距離を！
だから私が距離を詰めると同時に詰められた距離と同じだけ下がって縮地を不発にしたの?!
天才どころの騒ぎじゃない。
ここまで来るとチートだよチート！
でも、それ以上下がったら場外に出る。
ここで押し切る！
八艘飛び！
「めぇぇぇん!!」
「…！」
パシンと竹刀を盾にしてまたも防がれる。
これも躱されるのか?!
その後も私はフェイントにフェイントを重ねる5重フェイントや、左に八艘飛びしてその後右に八艘飛びする反復八艘飛びなどを駆使して何とか決めようともがいた。
だが、湊士君の難攻不落の鉄壁の前には為す術もなく、時間だけが過ぎていき、結局引き分けとなった。

元々湊士君は攻撃は得意ではない。
寧ろ逃げ切るのが本領だろう。
そう考えると、引き分けなのに負けた気がして、めちゃくちゃ悔しかった。
私は湊士君の方へ駆けていって、ピッと小手を外し、指をさしながら彼に宣言した。
「湊士くん、次は絶対に勝つから!!」
「ん」
湊士君も朗らかな笑みを浮かべながらうなづいた。
そんなこんなで剣道体験は終了。
周りの子達が、
「俺ら、アイツらに勝てんの？」
「いや、俺らは小学生だしいけんじゃね？」
「幼稚園児だぞ？負けるわけねぇ…よな？」
と、ザワザワしてて、先生が
「……ホントに彼らは初心者だったのだろうか」
と頭を抱えていたのを見掛けたけど。
私は特におかしい事は何もしていない（見て見ぬフリ）ので湊士君とお母さんと一緒に仲良くお家に帰りました！

第15話【流石イケメン】小学校入学してみたった【氏ねイケメン】

いっちねーんせーになったーら♪
いっちねーんせーになったーら♪
とっもだっちひゃっくにんでっきるっかな♪
はい、大きなお友達のみんなー！元気かなー？
小鳥遊　深月だよ！
道場に通い出してから早数ヶ月、私と湊士君は無事幼稚園を卒園しました。
卒園式の時凄かったなぁ。
同級生の女子がね、案の定湊士君に殺到したんだわ。
小学校どこ行くの？とか、お家に遊びに行ってもいい？とか。
ちなみに男子も湊士君のとこ行こうとしてたんだけど、女子が湊士君に集まってるのを見て、またアイツか、仕方ねぇなみたいな感じで比較的落ち着いてた。
おい男子大丈夫か。
そんな幼いうちから諦めなくても良いんだぞ？もっとがっついていこうぜ…
その後湊士君が、
「ねぇ？僕、深月ちゃんと帰りたいんだけどいいかな？」
という爆弾ぶっ込んだが為に、私に女子の羨望と嫉妬の視線が突き刺さりまくり、私は胃を痛めながらお家に帰る羽目になった。
湊士君、君のせいで私は夜道で背中を気を付けなきゃいけなくなったよ。
もっと自分の容姿に自覚を持って…ってまだ6歳だし無理だよなぁ。
いや、湊士君頭良いからその辺分かってそうだとは思うんだけど…
とまぁそんな事があった訳だが、皆さんお待たせしました。
いよいよ私、小学校入学します！

ここまで長かった！
もうね！今からウッキウキよ！
新しいランドセルも買ったし、通学路も確認済み。
深月～ここからこう行くのよ～って教えられたけど、ざっと見た感じルートを短縮できそうな所が多くあった。
これは帰宅ＲＴＡのタイム短縮に欠かせないね。
それとやっぱりね、人生やり直すのはこっからだと思うのよ。
小学校でやった事って意外と覚えてるものでしょ？
しかも勉強の基礎を学べる。
つまり、今後の人生、勉強も運動も出来る超絶優等生に成れるかはここで決まる。
前世の私はここの５年生でつまづいた。
図形とか苦手なのにハードなサッカークラブに入って体力カツカツのまま授業を受けるとかいう高校生ムーブをかましたせいで、当時のテストはなかなか酷かったものだ。
同じ過ちを繰り返すつもりは断じてないので、剣道をやりつつ体力作り。
家に帰ったら復習してきちんとその日のうちにやった事を覚える。
余裕があったら予習する。
それで行こう。大丈夫。２週目じゃないと出来ないけど、２週目だからきっと出来る。
私は深窓の令嬢を決め込むつもりも乱暴者になるつもりも無い。
弱きを助け、強きをパワーで捻り潰す。
私が同じクラスになったからにはイジメなんて起こらないと思え
（ドヤァ）
「じゃあ、お母さん！行ってきまーす！」
「行ってらっしゃい。登校中は危ないから塀を飛び越えたり、他人の家の屋根に登ったりしちゃダメよ～」
「そんなことするわけないけどはーい！」
相も変わらず注意する所が少しズレてる私の母であった。

結論から言おう。
やはり湊士君は湊士君だった。
持ち前のクールイケメンっぷりを無自覚に周囲へ振りまいていった彼は、入学式に訪れたお母様方から絶大な人気を獲得し、同学年の女子を魅了した。
わけがわからん。
初日だよ？まだ名前もわかんないでしょ？素性すらもわかんないでしょ？
どんだけみんな面食いなのさ。
世の中顔かよ！ふざけんな！
顔が良い奴はそれだけで得だよなぁ！
前世ではイケメンになって生まれたかったぜ！
嘘ですごめんなさい、産んでくれてありがとうお母様。
「はぁ…」
「どうしたの？」
湊士君のモテっぷりに今後の身の振り方で頭を悩ませていると、その悩みの種が心配そうに顔を覗き込んできた。
どうもこうも君の事で悩んでるんだよ、と言えたらどれだけ良いだろうか。
しかし、本人だってモテたくてモテてる訳じゃないのは知ってる。
だから、まあ、私は人差し指で湊士君のおでこを突っついて、
「あう…何するのさ」
「知らなーい」
と、湊士君へのちょっかいで矛は収めてあげよう。
本心？
そりゃくたばりやがれ下さいだよ、このコミュ障イケメンが。
どこか不服そうにしながらも、湊士君はやり返すことなく私の後を着いてきた。
後ろに沢山の追っかけ女子達を引き連れながら。
「湊士くん、今日だけごめんなさいだけど1回私から離れてお願いだから」

「……!?」
ガーン、という効果音が聞こえてきそうなくらいに落ち込む湊士君。いやだってさ、後ろの女子達の視線に私は刺殺されそうだったもん。針のむしろだよ針のむしろ。
しかも幼稚園の頃よりもみんな知恵が付いてきているもんだから何されるかわかったもんじゃない。
勿論コテンパンに穏便にやり返すつもりだけど、無いなら無いに越したことはない。
この時期あたりからだよなぁ～変にスクールカースト出来始めたの。
こう自分より下の人間を見ることで自分がマシに見えるとかっていう酷い価値観から出来上がるその謎カーストは一種の小政治みたいで息苦しい。
出来れば今世ではそんなスクールカーストなんて物は廃止にしたいものだ。
そのためにも我が幼馴染様には色々頑張ってもらうことにしよう。
そんな事を考えながら、私は先生の学校で暮らす上での注意などを聞き流すのであった。

第１６話【ぷるぷる】友達を！作ろう！【私悪いようじょじゃないよ】前編

小学校に入学して、そろそろ教室の雰囲気にも慣れ始めてきた今日この頃。
私と湊士君はとある問題に頭を抱えていた。
「どうしよっか湊士君…」
「僕は深月ちゃんが居れば別に」
失礼、私だけだった。
友達が！居ないんだ！
皆さんお忘れだと思うのでもう一度言っておくと、私は『元』男だ。
女子の友達の作り方なんてこれっぽっちもわからない。
その上私の前世はオタクコミュ障とかって言うコミュニケーション能力が壊滅的な状態であった。
ぼっちじゃなかっただけマシかぁ…無理やりぼっちにされかけた事はあるけど。
で、まごまごしてる間の湊士君と言えば、男子に誘われても断固として私の傍から離れようとしない。
人見知りかと言えばそうじゃなくて、多分私が遊んでないからだと思う。
だから私に気にしないで遊んでいいよ？と、伝えてもやっぱり離れない。
お陰で湊士君にも友達は居ない。
…湊士君のコレは依存なのだろうか？
将来メンヘラとかヤンデレの道に進ませないように気をつけなくては！
依存ダメ、絶対。
話が逸れましたごめんなさい。
とにかくだ！
男でも女でも誰でもいいから友達を作らなくちゃ！

班で別れて活動する時に、話せる人が1人も居ない時の気まずさは私が1番知ってるだろ！
何とかしなきゃ。
と、私はみんながドリルを一生懸命やってるなか、1人そんな事を考えていた。
あ、授業中です。
さっきの会話はアイコンタクトでやってました。
え？ドリルをやれって？
いや、全部家でやっちゃったからやる事ないのよ。
湊士君も同様ね。
仕方ないからノートに同じ事書いてるよ。反復練習は大事だからね。特に算数系は。
今のところ計算って言っても四則演算。しかも掛け算割り算じゃなくて足し算引き算の話だからこれといって困ることは無い。強いて言うなら余裕ぶっこいてすらすらすらーっと解答書いて、計算ミスって間違えるくらい。
なーんで3＋5を6って書いたんですかねぇ（頭抱え）
しっかり直しました。
あとゲームかなんかの話題出せたらいいんだけどね。
でも、小一の頃なんてゲーム機持ってる奴の方が少ないでしょ？
ましてや私、女子ですし。
女子で小一からゲームやる猛者っているのだろうか…
そして今世に転生してからめっきり触らなくなったよゲーム。
周りにやる人居ないとホントにやらないよねーゲームって。

昼休み。
「ねぇねぇ！何お話してるの？」
「えーと？」
「私、深月！よろしくね！」
私は女子が集団で話をしてる所にケツイを固めて参加してみた。
聞いてると、土崎さんという方はピアノのお稽古をしているらし

く、最近新しい曲を弾けるようになったとか。
田沢さんは何キュアがカワイイとか。
アイドルがどうとか、あの子が何してたとか。
正直に言おう。
無理だぁ！（涙）
アイドルとか何キュアだとか私テレビあまり見ないし！
ピアノのお稽古とか私そんな優雅な習い事してないし！
さすがお喋り大好き女の子。
全く話に着いてけない。
これについて行くには聖徳太子並の情報処理能力が必要だ。
あ、実際にはいなさそうなんだってね聖徳太子。聞いた時おったまげたわ。
だから私は仕方ないので、
「へぇー、凄いね土崎さん！将来はピアニストだね！」
「えー？そーかなぁ」
「うんうん、やっぱり○○キュアはカワイイよね！しかも強いし！」
「そうだよね！私はピンクが好きー！」
「あ、私も私も！」
「アイドルのダンス踊れるの？凄い！やっぱ大嵐のメンバーはカッコイイよね！」
「うん！アリサ、小野くんが好きなのー！」
と、話を聞いた情報だけで上手くよいしょしてました。
もう少しテレビを見ようと思いました。
しかもそれで終われればいいのに、どんどん人が集まる集まる。
何話してるのー？私も混ぜてー！
あーでもないこーでもない。
待って、私はそんな上辺だけで繋がるような感じじゃなくてもうちょっと踏み込んだ感じの友達を…
あーもうメチャクチャだよ！
私のお目目はぐるぐる混乱状態。
流石にこれは私の手に負えないです。

助けて欲しいなーと湊士君に視線を送ると、湊士君が何やら口パクで何事か伝えようとしてくる。なになに？
「が、ん、ば、れ？」
喧しいわ！
いや、口パクで話してたから喧しくは無いんだけど。
いいから助けてよ！
来るだけでいいから！
来ればモーセの海割りの如く女子掃けてくと思うから！
そんな切なる思いが通じたのかようやく湊士君が重い腰を上げてこちらに近づいてくる。
中々に不機嫌そうな顔をしながら歩いてくるが、そんな彼を認識した女子が1人、また1人と私から離れていく。
案の定、湊士君が近づいてきたら女子が割れた。
私への1本道が出来た。
湊士君は左右を見てひとつため息をつくと私に向かってこう聞いた。
「…こういう時、僕はどうしたらいいの？」
それに対して親指を立てながら私はこう答える。
「笑えばいいと思うよ」
湊士君の乾いた笑いが印象的だった。

第17話【ぷるぷる】友達を！作ろう！【私悪いようじょじゃないよ】後編

友達を作ろうと思い立ったものの、幼馴染の顔面偏差値が高すぎて、いつも一緒に居る私が嫉妬の念で殺されそうな今日この頃。
まあ1度死んでんだけどね！（唐突のブラックジョーク）
未だに私は友達を作れずにいた。
こんなのオフ会ゼロ人よりひでぇや。
なんでだろなー愛嬌が足りなかったのかなぁ。
確かにぶりっ子は出来ないけどさ、寧ろ嫌いだけど。
いずれにせよ若干諦めムードなんよ。
なんかもうこのままでも卒業出来るし…
いやいや！ダメだから！
それだと前世と一緒じゃないか！
何か、何か打開策は無いのか……
湊士君の協力は期待出来ない。
彼は友達を作ろうとは考えていないからだ。
どうしてそうなった。
必要無いとかそんな悲しい事言わないでよ…
母さんや父さんにも言えない。
下手に心配はかけたくないしね。
うーーーーーーんんん……
そんな風に頭を抱えて悩んでいると、黒板の前の方で大きな声が上がる。
「男子邪魔！どいてよ！」
「はあ？女子の方が邪魔なんだけど！バーカ」
およ？これはアレだな。
小学生あるあるの1つ、男女間戦争だね。
理由はその時々で変わるけど何かにつけて男女の間で「ちょっと男子！」とか「うるせえ女子！」とかしょうもない争いが起こるんだよ

ね。
どうやら男子が黒板の前で悪ふざけしていたけど、その近くにいた女子が通り道を塞いでて邪魔だからどけろって言ってる感じか。まあ他の人も通るかもしれないから注意するのは正しいんだけど、それは私たちがやることじゃなくて先生が注意することだ。
だから、私も湊士君もこれに関しては総スルーしてるんだけど…
は！もしかしたら！
この男女戦争止めれば友達出来るのでは？
停戦条約結べば行けるのでは？
来た！コレだ！これで勝つる！
「ちょーーーっと待った！」
「「……???」」
私は声を張り上げて二人の間に入っていく。
男子の方は確か佐藤君で、女子の方は能代さんだったな。
佐藤君は男子でサッカーしに行く体育会系のわんぱく少年って感じで能代さんはクラスの規律を守る委員長って感じの子。
そりゃソリも合わないよ。
私は2人の顔を交互に見て、にっこりと笑う。
「喧嘩したらダメだよ！仲良くしようよ！」
「うっせバーカ！死ね！」
私がお節介を焼くと案の定、佐藤君は反発してこちらに殴りかかってきた。
あーあ、こいつ親に女子殴っちゃダメって教わらなかったのかな？
それともそこまでおツムがないのかな？
仕方ないなぁ。
私は殴りかかって来た佐藤君の腕を掴むと思いっきり握ってやる。
ほーら女の子の手だよ？喜べよ。
「痛い痛い痛い!!!」
「えー？どうしたの佐藤君？どこが痛いのー？私分かんなーい。ね？能代ちゃん？」
「ひっ、あ、う、うん」

え？今『ひっ』って言った？もしかして怯えさせちゃった？
あーこれは罪重いなー、女の子怖がらせるとか佐藤君ほんっとギルティ。
これはキツいお仕置きが必要だね。
「湊士君」
「ん」
「お願いね？」
「ん」
「は？お前何すんだよふざけんな放せよクソ！おい！」
湊士君に佐藤君を手渡すと、湊士君は彼の襟をつかんで引き摺ってった。
佐藤君は湊士君の手から離れようと湊士君を蹴ったり髪を引っ張ったりしてるけどビクともしない。
はっはっは、舐めるなよ私の幼馴染を。
耐久力に関して右に出る者はいないからね！
何処に連れてかれたかは私もわからん。
まあ、何とかしてくるでしょ。
「大丈夫？能代ちゃん。ああいうのはね、ほっといた方がいいんだよ」
「で、でも、先生が」
「叱るのは先生のおしごとだよ。ルールを守るのはいい事だけど、それを他の友達にまで押し付けたらダメだよ。窮屈だよ」
「……でも」
納得いかない様子。
そりゃそうだ。ルール守るのは正しいのに、それを見過ごせって言ってんだもん。
能代さんみたいな人には耐えられないだろう。
でも、それでいちいち注意してる方が自分の時間が減って無駄な気がするんだよね。
それに気付けばもっと楽しいと思うんだけど。
「能代ちゃんは佐藤君に怒るの楽しい？」
「…楽しくない」

「楽しくない事に時間かけるの勿体無いよ！もっと楽しい事に時間を使おうよ！」
これで伝わってくれ！これ以上の語彙力は今の私では無理だ！
他人の説得なんて殆どやった事ないから何が正解なのか全然わからん。
「…わかった。ほっといてみる」
「うん！それがいいよ！ほら、一緒に遊ぼ！」
良かったー、納得してくれて。
で、この後流れるように遊びに誘った能代燈（のしろあかり）ちゃんと私は仲良くなり、燈ちゃん、深月ちゃんと呼びあう仲になりました！
やったね！友達1号だ！
あと、なんか湊士君に連れられた佐藤君は湊士君と仲良くなってて燈ちゃんに謝ってました。
2人は仲直りして偶に話したりするようになってた。
けど、時折また乱暴しそうになった時、ふと動きを止めてガタガタ震えだし、ごめんなさいと何度も呟くようになった。
おそらく犯人であろう湊士君を横目で見ると、砂城を崩した時を思い出した様な渋い顔で佐藤君の事を見てた。
…やーりすぎちゃったのね。

第１８話【ようじょ！ようじょ！】はじめてのうんどーかい【誰よりも早く！】

佐藤君、燈ちゃん、湊士君、私の４人で遊ぶようになって早数ヶ月。
６月、運動会です。
中間何があったって？まあ、普通に過ごしてたよ。
剣道行って、勉強して、遊んで、腹筋して、マラソンしてエトセトラエトセトラ。
小一なんてそんなもんよ。
あー早くおっきくなりたい。
はい、もう一度言うけど運動会です。
私達の学校では赤組と白組と金組に別れて対決します。
基本的に赤が１組、白２組って感じに別れてる。
ちなみに金は教員の組。
この学校には伝統的に教員も小学生に混ざって運動会に参加する特殊な伝統がある。
もちろんそのまんまやれば大人が勝つに決まってるのである程度ハンデが設けられるので、金組が勝ったり、子供達の組が勝ったりと毎年一進一退の攻防が繰り広げられている。
だが近年は金組が体育会系多めなのか勝ち越しており、子供達にどうせ負けるんだろうなぁという負の向かい風が吹いている。
ちなみに、昨日の担任の一言がこちら。
「明日は運動会だァ…てめぇら！首洗って待ってな！特に小鳥遊ィ！」
完全に教師とは思えないくらいの暴言である。
いくら次の日が運動会で気が立っているとは言えど、流石に教室内がぽかんとしたね。
小学生に言うセリフではない。
これ教育委員会に何とかすれば解雇処分降りるよね絶対。
あとなんで私名指しされたの？

マジでわかんないから金組は叩き潰す、絶対に。
私達４人は赤組だ。
仲間内で争う事にならなくてホントに良かった。
みんなで運動会楽しみたいし。
そんなこんなで始まった運動会。
よく分からん選手宣誓がどうたら開会式がどうたらが終わり、もうすぐ一番最初の競技が始まる。
さて、最初の競技はなんだったか…
『1年生の皆さん、出番です。徒競走の準備をしてください』
あ、私達の番だ。
「私達のでるやつだね」
「へっへー、負けねぇからな湊士！」
「…僕に勝てるの？」
「はぁ?!勝てるしい！ちょっと頭いいからってバカにすんなよばーか！」
「…ハッ」
「んだよその笑い方ぁ！舐めてんのか?!」
「…はぁ、湊士、馬鹿じゃないけど健(たける)に言い返す所はアホだよね…」
「ん？湊士君は天才だよ？」
「深月ちゃん…？」
え？何その目は燈ちゃん。
可哀想な人を見る目でこっちを見ないでよ。

「はーい、じゃあ並んでねー」
先生の指示に従って私は列の先頭に立つ。
男子は先に走り終えているので、後は私と燈ちゃんだけだ。
名前的に私の方が若い番号なので燈ちゃんより先に走るわけだが、まあ、見た感じヤバい。
みんな身長が私より高い。
威圧感が凄いのだ。

でかい人が近くに居るだけでこんなにもプレッシャーが掛かるとは、前世じゃ味わえない体験だね。
まあ、
「位置についてー」
だからと言って負けるつもりは無い。
「よーい」
私は位置についての時点で足を後ろに下げ、両手を地面に着いていたので、よーいと掛け声がかかると同時に腰をあげる。
バンッ！とピストルがなる。
私は一心不乱に走り抜けた。
腕を振る、足の回転数を上げる。
早く、早く、1歩でも前に。
気が付いた時にはゴールテープを切っていた。
「やった！1位だ！」
「おめでとう、深月ちゃん」
「スゲーはえーな深月！ま、俺より遅いけどな！」
「ありがとう、湊士君、佐藤君！」
ゴールの方で待っていてくれた2人にお礼を言う。
佐藤くんのツンデレがちょいちょい面白くて笑ってしまいそうだ。
なんでか知らないけど、周りがザワザワしてたのは気の所為だよ。
小一でクラウチングスタート？とかそんな呟きは聞こえてない聞こえてない。
あの後、私と一緒に走った子達はポカンとした顔で私の事を見てて、燈ちゃんは「ちゃんと（加減して）走りなさいよアホ！」と言って私の頭を叩いて来た。
おかしいな…ちゃんと（したフォームで）走ったんだけど…
解せぬ。

～三人称ｓｉｄｅ～
後に伝説となるこの運動会。
優勝は赤組だった。

なんと、金組に総合点数で大差をつけ圧勝したのである。
1年生が強すぎたのだ。
学年混合リレーでは1人の女子生徒が他の選手にとんでもない差をつけ、同じく混合綱引きでは1人の男子生徒を起点に綱が微動だにせず、玉入れでは赤組の玉がまるで吸い込まれるようにカゴの中へ入っていった。
元々赤組は体育の得意な子も多く、優勝候補に挙げられていたのだが、金組、つまり教員側がやはり強いので優勝出来ないとされていた。
まさかのジャイアントキリング。強者喰い。下克上。
教員はたった2人の1年生に負けたと言っても過言では無い。
彼らはあまりの悔しさに涙を飲み、こう決意した。
「アイツら絶対にクラス替えでクラス別々にしてやろう」
と。
この判断が、より教員側にとって悪い方向へ進んでいくとも知らずに。

第19話【ビバ！】はじめてのなつやすみ【サマバケ！】

爽快なほど透き通った青い空！
遠くに浮かぶ白い入道雲！
エアコンガンガンに効いた部屋で食べるアイス！
やかましい蝉が止まってる木に蹴り入れて！
やって参りました夏休み！
ビバ！サマーバケーション！
「あーアイスおいしー」
「体冷えると、体調悪くするよ。ほどほどに、深月ちゃん」
「はーい湊士くん」
という訳で、私達は初めての夏休みを迎えていた。
そして始まったので何をするかと言えば、まず宿題。
私と湊士君にとって小学1年生の宿題なんて言うのはおちゃのこさいさい朝飯前なので、夏休みの後半にいくらでも遊べるようにと早めに終わらせようという魂胆だ。
しかし、1年生なので難しい内容は出ていないが、反復練習を推奨しているのか少々課題の量が多めなのでちょっと大変。
特に小学生特有の課題、自由研究なんかは親の協力がないと大変だったりする。
それは後でやるとしても、課題プリントは残しておいても得にならないので、こうして湊士君の家と私の家をお互いに行き来しながら課題を進めているのである。
幸いにも始まって3日目の今日にはもう終わる目処が立っている。
この調子なら自由研究にも沢山時間が裂けそうだ。
どうしようかなー自由研究。
一応貯金箱でも作って提出してしまえばそれは工作ということで自由研究扱いになるけど、折角だったらなにか大きな物を作りたい。
共同研究というのは認められてないので個人の範囲にはなるけど、

前世よりもはっちゃけて生きると決めたからにはやっぱり自由研究というから研究をしたいところ。
さーて何を研究しようかなぁ。
あ、ちなみに今日は湊士君が私の家にお邪魔していて、リビングのテーブルで向かい合って課題を片付けている。
さっきのアイスはうちにあった棒アイスだ。
バニラ味の当たり付き。リーズナブルなお値段で買えるからお財布にも優しいし美味しいという最高の棒アイスである。
私は下を見続けて少々痛みを感じている首を軽く回しながら、湊士君に話しかける。
別に集中して解かないと解けない問題というのは無いので、多少片手間でも問題なく手は動かせる。
「にしても、国語と算数だけなのにいっぱいだね」
「うん、難しくないけど、手が疲れる。ちょっと大変」
プラプラと鉛筆から手を離し、軽く振って疲労を誤魔化す湊士君。
わかるー。
鉛筆ってシャーペンみたいにグリップが付いている訳じゃないから固くて長時間持つと指が痛くなってくるし、なんならペンだこ出来るからあんまり得意じゃない。
あと鉛筆の芯と紙が擦れると伝わってくる、あのザラザラとした触感が私は前世とても嫌だった。
しかし、鉛筆はマークシートに使ったり、絵を描くのに使ったりと何かと使う機会が多いのでできるだけ慣れるように努力はしてる。
あーーーーざらざらするーーーーぞわぞわするーーーー
ほんとに苦手なんだよなーこの感触と言い音と言い。
発泡スチロールが擦れる音とかダンボール同士が擦れる音も苦手だったりする。
逆に紙と紙が擦れたりするのは大丈夫だ。
黒板に爪立てて引っ掻くのはやめろ。あれは万民に効く音響兵器だ。
「うぇぇ……」

「大丈夫？」
思わず机に突っ伏した私を、湊士君が心配して声をかけてくれる。
私は軽く湊士君に手を振りながら問題ないことを伝えた。
「う、うん。でも鉛筆って苦手だな～いちいち削らないと書けないし、持つところがどんどん小さくなってくるし、言ってもしょうがないんだけどさー」
「まあ、鉛筆使ってくださいって、言われてるし。我慢しよう。僕も我慢するから」
そう言って一緒にがんばろうって言ってくれる湊士君はほんとイケメンだと思います。
仕方ない、そう言って励ましてくれるのなら私も頑張ろう。
何せもうちょいで終わるんだ。
なら最後のスパート掛けて頑張った方が達成感がある。
私は、時折湊士君からの声援を受けながら、一生懸命課題プリントを進めていく。
その努力が実り、無事夕方には課題プリントは全て片付蹴ることが出来た。
そういえばとふと気になったので私は、湊士君に自由研究について聞いてみる事にした。
「ところで湊士くんは自由研究どうするの？」
「相対性理論について、纏めてみようかなって」
そーたいせーりろん？ワッツ？
あー！相対性理論ね。
相対性理論?!
「それ多分大人でもついていけない人居るやつだよ湊士くん…」
「え？面白いよ？」
つくづくこの幼馴染みは規格外である事を思い知らされる。
時折湊士君も私と同じ転生者なんじゃないかと疑ってしまう事もあるが、転生者なら真っ先に私に転生者かどうかコンタクトとってくるだろうし、こんなに頭が良いんだ。
とっくの昔に私が転生者であることなんて見抜いているだろう。

それについて触れてこない限りは私は何もしないし、それにそうでないのは何となくだけど分かる。
こんなに頭が良くても彼だって普通に小学生なところがあるのは、私だけじゃなく友達の佐藤くんや燈ちゃんだって知っている事だ。
頭脳明晰で体力お化けだけど、少し負けず嫌いな幼馴染。
そんな彼や友人達とずっと楽しく暮らせればきっと楽しいだろうなんて、思いを馳せながら、私は新しい棒アイスに齧り付くのであった。

後日の話だ。
私はお腹を壊してトイレにこもり、無事湊士君の介護を受けましたとさ。